

デート・ア・ロスト～華恋アンリクワイテッド～

御船アイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

すめらぎかれん
皇華恋は、ごくごく普通の大学生だった。

学友の五河土道や夜刀神十香、鳶一折紙らと楽しく学生生活を送り、日常を過ごしていた。

だがある日、彼女は思い出す。

自分が、形を持った災厄と呼ばれる存在、精霊であるということ。

だが彼女は、それ以外の自分の事を何も覚えておらず――

過去を失った少女を、デートして、デレさせる!?

目次

夢と現	1
識別名〈ゴースト〉	10
精霊と元精霊	19
四七ゲーミング	26
八九コスチューム	35
二六ドロイーング	45
三五スイーツ	54
十一サイトシーング	62
私が生まれて壊した世界	74
離別、そして	82
思わぬ再会	86
Unrequited love	91
いつか、きつと	98

夢と現

空が燃える。地が燃える。世界のすべてが燃えている。
視界に入るものすべてが焼け、崩れ落ち、息絶えている。
何も残っていない、空虚な世界。死が支配する、絶望の世界。
そんな世界に、私はいた。
一人ぼっちで、そこにいた。

私の胸は締め付けられるように苦しくて、喉は息ができないほどに痛くて、頭は強く殴られたかのようにぐらついて。

そしてなにより、心が剣を突き刺されたかのように悲鳴を上げていて。

無限とも言える悲しみ。

底のない絶望。

そんな暗く、果てしない苦痛が、私を支配していた。

ああ、どうして、どうして――

いくら問うても答えは帰ってこない。いや、もともと答えは知っているのだ。

問いかけるまでもなく、私は答えを持っているのだ。

すべての元凶は自分自身だという、残酷な答えを。

それを思い返すたびに、私は枯れ果てた涙を流し続け、消え果てた声で叫び続けるのだ――



「……………んん」

すめらぎかれん
皇 華恋は、重たい瞼をゆっくりと開いた。

彼女が乱れたベッドから上半身を起こすと、ダボダボのTシャツ姿が露わになり、長い黒髪がバサリと揺れる。

「……………なんだか凄く嫌な夢を見ていた気がする」

彼女は胸中にわだかまる不快感で顔を歪めながらそう言った。

夢の内容は覚えていないが、とても辛い夢を見ていた。それだけは

覚えている。

だが、思い出せないせいで余計にそれは彼女を苛んだ。顔にはうつすらと涙が流れた跡すらある。

「はあ……またか、最悪」

華恋は涙の跡を抑えながらそう呟く。

彼女は時折そういった夢を見ていた。内容はいつも忘れるが、辛いことだけは分かる夢。

そのたびに彼女は頬を涙で濡らし、憂鬱な気分になっていた。

「……せめて、夢の内容すら分かればこの不快感も薄まるのかしら」

華恋は不機嫌な表情でそう呟きながら、ふと時計を見た。

「……って、ああああああああああああつ!？」

そして、叫ぶ。

「もうそろそろ一限始まるじゃん!?! 今日遅刻したら出席日数不足で単位消えるのにつ! やばやばやばつ!」

華恋は慌てながらベッドから飛び抜け、急いで準備をして部屋を出るのだった。

「ふいーっ……」

それから少しして。華恋は彼女の通う天宮市にある大学の講義室の席に疲れた様子でついていた。

「思ったよりは余裕あるタイミングで入れたか……」

体にかいた汗をハンカチで拭いながら言う華恋。

彼女は今、黒のブラウスに白のロングスカートである。髪は起きたときのボサボサ具合が分からないぐらいに流れるように綺麗に伸びている。

が、そんな美しい黒髪も七月の夏場の暑さで汗だくになっているせいでいまいち栄えない。

「この時間ならもうちょっとゆっくり来ても大丈夫だったかな……? いやしかし始まる直前なのは変わらないわけで……」

「おう華恋、今日もギリギリだな」

華恋がブツブツと呟いていると、彼女に話しかける声があった。声に

反応し彼女が横を向くと、そこには声の主を筆頭に、三人の男女が席にかけているところだった。

一人は中性的な顔立ちをした男。もう一人は夜色の長髪をまとめた、水晶の如き幻想的な双眸が印象的な女性、そしてもう一人は、肩口をくすぐるほどの髪をした、人形のような顔立ちの女性。

それぞれ、華恋の大学からの友人である五河士道、夜刀神十香、鳶一折紙の三人である。

「ははっ、おはよう士道。まあね、どうも朝は弱くて……」

手をヒラヒラしながら笑いかける華恋。そんな彼女に士道は苦笑いをする。

「ははっ、まあ気持ちは分かるよ。俺も朝は苦手だし……」

「うむ、士道は毎朝琴里に起こしてもらっているからな」

「えっ、妹にいつつも起こしてもらってるの？ 何そのギャルゲー……」

「べ、別に毎朝って訳じゃないからな！ たまにだよたまに！」

華恋の反応に、慌てて否定する士道。だが、妹に起こしてもらう日がある時点でやはりギャルゲーなのではないのかと思う華恋である。「私に言ってくれば、住み込んで琴里の代わりに毎朝起こしてあげる。おはようからおやすみまで、ゆりかごから墓場まで見守り続ける」

「むっ!? なんだと!? な、ならば私だって士道のことを一生見守り続けるぞー！」

「いや、そんながっちり見守ってくれなくていいから……」

「ははは」

折紙の言葉に対し返す十香と士道を見て、笑う華恋。

「相変わらず三人共仲がいいなあ、ちよつと妬けちやうよ」

「はは……まあな」

華恋の言葉に、照れくさそうに笑う士道。

彼らと華恋は、大学からの付き合いだったが、士道と彼女らは高校からの付き合いらしい。だが、華恋にとってそれは意外な事だった。

なぜなら、三人から伺い知れる絆は、もつともつと深い関係のよう

に見えたからである。

別に断言できる証拠があるわけでもない。だが、華恋にはそう思えた。

「……羨ましい限りだねえ」

わいわいと話す土道達を見ながら、華恋は小さく呟く。

「ん？ なんだ？」

「いや、なんでもないよ」

華恋の言葉に気づき問いかけてきた土道に対し、華恋はごまかすように笑うのだった。

その胸中に、説明できない寂しさを抱えながら。



「んー今日はどうしよっかなあ……」

華恋は大学の終わった夕方、天宮市商店街にあるスーパーを訪れていた。

その日の夕食を買うためである。

「……お弁当でいっかあ面倒だし」

と言つても、彼女は食材を買わずに惣菜と弁当コーナーへと向かっていった。

「……ん？ 華恋か？」

そんなときだった。華恋の後ろから聞き慣れた声が聞こえてきたのだ。

「え？ あ、土道」

振り返ると、そこにいたのは土道だった。彼の手にある買い物かごには、沢山の食材が入っている。

「偶然だねー土道。土道も夕食の買い出し？ 一人って珍しいね、十香達は？」

「ああ。十香は折紙とちよつと二人で寄りたい場所があるからって言つてたから今日は俺一人で買い物だよ。そう言う華恋もか？」

「そ。まあ買い出しと言つても私はお弁当だけだね。そっちはすごい

買い込んでるじゃない。なんかパーティーでもあるの？」

「いや、うちって結構大人数で食べるから、定期的にいっぱい食材買い置きしておかないといけなくて……」

「大人数で？ 土道の家ってそんな大家族なの？」

「いや十香達とかが……あ」

「……ほほう？」

土道がうっかり口を滑らせたと言った感じだったのを、華恋は見過ぎなかつた。

ニヤリを笑う華恋。土道はそんな彼女から目を逸らす。

「……何でもない、忘れてくれ」

「いいや、見過ごせないね！ 土道、十香と一緒にご飯食べてるの？」

しかも、その口調一人じゃないね？ ははーん、さてはあの噂は本当だったのかな？」

「……大方予想がつくけど、噂って？」

「いや、土道はかなりのプレイボーイで家にハーレムを形成してるって」

「大学でもその扱いかよチクシヨウ！」

叫ぶ土道。そんな彼を見てカラカラと笑う華恋。

「はははっ、まあ人にはいろいろ事情があるだろうけど、十香や折紙を悲しませるなよー？ 特に折紙は下手な事したら怖そうだし」

「別に変なこととはしてないからそこは信じてくれ」

「分かったよ。……でも、羨ましいなあ」

「へ？ 何がだ？」

華恋の羨む声と表情に、土道は疑問を返す。

「いやさ、そういう仲のいい友人がいることにさ。土道はそういうの、恵まれてそうだなって」

「……そうだな、それを否定する気はないよ。俺には、大切な仲間達が沢山いるから」

「ふうん、言うじゃない」

そう言つてニカッと笑う華恋。

「でも、それは華恋もそうなんじゃないか？ 華恋の気持ちのいい性

格だったたら、仲のいい友達は沢山いそうだけど……」

一方で、土道はそんな彼女に疑問を口にする。すると、華恋は笑いながら返す。

「ああ、実は私そういうの全然ないんだ。いや、いないっていうか分からないって言えばいいのかな」

「分からない？」

「うん、だって私、昔の記憶がないから」

「……えっ!?!」

土道は思わず驚きの声を上げる。

「ああ、そんなに大きさに取らなくていいよ。私別に気にしてないし」
それに対して、華恋は横にヒラヒラと手を振って答える。

「いやでも、記憶がないって……」

「うん。私、大学に入る前の記憶がないんだ。なんていうか、気づいたら大学に入っていた感じ？ まあ一般常識とか勉強とかはしっかり頭に残ってたから生活は苦労しないからいいんだけど」

「……………」

土道は思いがけないカミングアウトに、少し口をつぐんでしまう。

だが、相変わらず華恋は笑っていた。

「だから、そんな気にしなくていいって。今は今で楽しくやっているからさ。それに、友達って言うなら土道達がいるじゃない。それとも、私がそう思っているだけで土道達にとっては私は友達じゃなかったとか？」

「へ!?! いやそんなことないって！ 華恋は俺達にとって大事な友達の一人だよ」

「そっか、ありがとう、土道」

そう言っただけにかむ華恋。その可愛らしい笑顔に、土道は思わず顔を赤くする。

「あ、ああ……」

「よし、じゃあそんな友達の私の買い物にちよっと付き合っつてよ。弁当買おうと思っただけど、土道と話したらたまには自前で作ろうと思っっちゃった」

「お、そうか。なんならアドバイスするぜ」

「うん、ありがとう」

そうして華恋は、土道と一緒にスーパーの各所を回ることにしたのだった。

「いやーいろいろ買った買った」

スーパーからの帰り、華恋は両手に食材が入ったレジ袋を持って土道と一緒に夕暮れに沈む帰路についていた。

途中までは帰り道が一緒なのである。

「本当、色々買ったよなあ。大丈夫か？ 一人で消費しきれるかそれ？」

「まあ、大丈夫でしょう。私、ものぐさだけど食べ物粗末にしない自信あるし」

「ははっ、そうか。それなら安心だな」

談笑しながら並んで歩く二人。

そんなときだった。

——パキッ。

華恋達の目の前で、空がひび割れた。

「——え？」

華恋がその光景に思わず抜けた声を出す。

空間にひびが入る。そんなありえるはずのない矛盾した現象が、彼女達の目の前で起きていた。

ピキピキと、赤いひびがなにもない空に走っていく。

そのひびはやがてどんどんと大きくなっていき、そしてついには、パリンと、ガラスが割れ飛ぶように空間が弾け飛んで——

「危ないっ！」

その瞬間、土道が華恋を掴んで倒れ飛ぶ。

「きゃっ!？」

華恋は思わず声を上げる。持っていたビニール袋が地面に落ちる。だが、そんな事を気にしている余裕はなかった。

なぜなら、先程まで華恋がいた場所に、眩く赤く輝く不可思議な怪

物が、四足歩行で飛びかかっていたのだから。

「あれ、は……」

その怪物は四つの足で地面を歩き、輪郭をおぼろげに燃えさせていた。

不定形の、存在すらおぼつかない謎の存在。

それは見るものに否応ない恐怖を与える。そんな存在だった。

「グルルルルルル……!」

狼のように唸る怪物。

だが、なぜだろうか。

「あ……それは……」

それを見た瞬間、華恋の頭は、まるで霞が晴れていくかのように冴えていくのだ。

「華恋、逃げろっ!」

土道の声が響く。どうやら華恋を一人逃がそうとしているようだった。

だが華恋は、逆に、立ち上がってその怪物に一人近づいていった。

「華恋!」

「……わ……たし……私……は……」

華恋を見ると、再び襲いかかるために跳ね跳ぶ怪物。

「ガウツ!!」

「華恋ーっ!」

彼女を助けるために、駆け出す土道。

だが、次の瞬間だった。

「?!?!」

ズン! と、道路から無数の棘が伸びて、その怪物を串刺しにしたのだ。

「ガ……!!」

それだけではない。いつの間にか、華恋の姿が変わっていたのだ。

左が黒、右が白の二色に分かれた、しかし豊満な胸と白絹のような肌が目を奪わせる肩を露わにした着物を羽織り、流れる大河の如き美しさを持つ黒髪に、彼岸花のかんざしを差した、まるで日本人形かの

ような姿に。

その場違いな美しさと、絶命している怪物という異様な光景に士道
は目を奪われていた。

「私、は……」

一方で、彼女は口を開く。

自分自身の存在を、確かめるように。それを口にするこどで、夢を
現にするように。

「私は……そう……精霊。精霊、だった……」

識別名〈ゴースト〉

士道と華恋の出会い、大学に入ってすぐのことだった。

大学に入って初めての授業で隣の席にいて話しかけてきた女性、それが華恋だった。

なんてことはない。大学生の気ままな友人作りの一環である。それに士道も乗り、彼女の気安い性格を気に入った士道はすぐさま仲良くなり、そのまま彼の大切な仲間である十香や折紙もそのまま華恋と友人になっていった。

彼女は明るく、はつらつとしていてまるで男友達と話すかのような感覚で話せた。

大学での新たな出会いに、士道は嬉しさと楽しさを見出していたのだ。

だが、そんな彼女が。

つい先程まで、大学の気安く付き合える友人だと思っていた女性だが、精霊となった。

いや、精霊だったことを、思い出したようであったのだ。

士道達の世界から消えたはずの、精霊に。

それはあまりに衝撃的な事であった。だが、同時に士道は思ったのだ。

かつて、他の十人の精霊にも抱いた想いを、彼は彼女に抱いたのだ。

美しく、そして、儂い、と。



「そうか……私は……」

華恋は、自分の手をまじまじと見つめながら、自分の存在定義を見つめ直した。

今まで自分は普通の大学生だと思っていた。だが、それは違った。

自分は精霊。人々に仇をなす力を持った、超常的存在。それが皇華恋という存在。

だが、それ以上が思い出せない。なぜ自分は精霊であることを忘れていたのか。

そもそも、どうして自分が生まれたのか。自分はどこから来たのか。そんなすべてが、何も思い出せない。

ただ分かるのは自分自身の存在、そして――

「華恋っ！」

そのとき、土道の叫ぶ声が聞こえた。

どうやら、先程自分を襲ってきた不定形の怪物が、また次元の壁を壊して三匹現れたらしい。

「グルルルル……い！」

そして今、そいつらは自分を狙っている。華恋はそれをすぐさま理解した。

ならば次に華恋はどうするべきか。彼女はそれを理解していた。

「――〈支配皇帝〉」

華恋は手をかざし唱える。

精霊にとって武器であり世界に仇をなす災厄でもある天使の名を。

「ッ?!?!」

彼女がその名を唱えた瞬間、一匹の怪物の体を先程の怪物のように、コンクリートの棘が貫いた。

「――ッ!!」

一瞬の出来事に驚いたのか、それとも警戒したのか残り二匹の怪物が飛び退く。

が、華恋はそれを目で追い、再び手をかざす。

すると――

「ガッ!?!」

一匹の首が、すっぱりと切り落とされたのだ。

まるで、見えないギロチンによって断首されたかのように。

「――……ッ!!」

それを見て、最後の一匹は逃げようと華恋に背を向ける。そして、その目の前の空間を引っ搔いて再び『割った』。

だが、華恋はそれをも逃さない。その怪物と割れた空間へと手を伸

ばすと、その空間が見る見るうちに修復されていったのだ。

そして、それに驚き再度空間を破壊しようと怪物が空間を引っ掻くも、一向に空間は割れず、ただ前足が虚しく空を切るのみ。

「……………」

華恋はその怪物にゆっくり歩み寄る。

途中で、道路標識を綺麗な断面で切り取り、それを引きずりながら。そうしてせまってくる華恋に気づいた怪物は、一瞬ためらった姿を見せながらも、再び華恋に飛びかかってくる。

「ガアッ！」

「フンッ！」

だが、華恋はその怪物を一瞬で両断した。

先程手にしていた道路標識を、大きなデスサイズへと変えて。

「……………今ので、最後かな」

華恋は周囲を見回して言う。そして、士道を見つけると、彼にバツの悪そうな顔を見せながら頬を掻いた。

「……………あー、えーつと士道、これはだね……………」

どう説明したものか。一体何と言えばこの状況を理解させられるだろうか。そもそも怖がられていないだろうか。引かれていると嫌だな。

そんな事を想いながら、華恋は士道への言い訳を考える。

だが、士道は思わず言った。

「華恋……………お前、精霊だったのか……………!?!」

「……………えっ!?! 士道、精霊のこと分かるの!?!」

華恋は、その士道の言葉に逆に驚かされるのであった。



「なるほど……………精霊を保護するへラタトスク、それに封印する力を持った士道と精霊達、ね……………」

華恋が未知の敵を撃退して少し後。

彼女は士道達の事情を説明され、その事実を受け止めていた。

今、華恋がいるのは空中に浮遊する空中戦艦へフラクシナスの司令室である。そして、彼女に士道達側の事情を伝えたのは、黒と白のリボンで髪をまとめチュッパチャップスを啜えている少女、へフラクシナスの司令官であり士道の妹である五河琴里である。

士道から連絡を受けた琴里は、すぐさま二人をへフラクシナスで回収、まずは自分達のことを彼女に説明したのである。

「ええ、理解してくれたようね」

そして琴里の口から説明された。精霊を保護するへラタトスクという機関のこと。かつて士道が十人の精霊の霊力を封印してきたこと。

「うんまあ、驚いていないという嘘になるけど、理解はしたよ。しかし……」

華恋は司令席に座る琴里とその横にいる士道を見た後に、さらにその横を見る。

そこには、十人の少女が様々な視線で華恋を眺めており、その中には彼女のよく知る人物もいた。

「まさか、十香や折紙も精霊だったなんてね……」

そう、十香と折紙の事である。

「私も驚いたぞ！ まさか、華恋が精霊だったとは！」

「正確には、私達は元精霊。今は普通の人間」

驚きを素直に口にする十香に、表情を崩さず言う折紙。

華恋の驚きは彼女達だけではない。

「あの歌姫、誘宵美九、そして人気漫画家本条蒼二……いや、二亜さんだっけ、までも精霊なんて……」

誘宵美九と、本条二亜、その二人もまた華恋に驚愕を与えていたのだ。

「いやーん！ まさか新しい精霊さんが増えるなんて驚きですー！ それもストレートな美人タイプ！ お近づきの印にハグしていいですかー!?」

「にゃははー！ 人気漫画家なんて……ま、本当のことだけどね！」

「お、おお……」

二人の独特な雰囲気、華恋は若干気圧されてしまう。その中でも熱烈な美九のアプローチをなんとか回避しながら、華恋は他の元精霊達を見る。

彼女の目線の先にいるのは、時崎狂三、氷芽川四糸乃に彼女のペットよしのん、星宮六喰、八舞耶俱矢、八舞夕弦、鏡野七罪の六人だ。

身長も雰囲気もバラバラな七人から、またそれぞれ別々の視線を向けられているのを華恋は感じた。

「あらあら、そんな熱烈な視線を向けないでくださいまし。わたくし、震えてしまいますわ」

「新しい精霊さんなんですか……？　でも、精霊って私達だけだったんじゃない……」

『だよなー、もうこの世界には精霊はいないんじゃないやなかったっけー？』
「ふむ。そこじやのう。なのはどうして新たに力を持った華恋殿が現れたのか……」

「ククク、これはげに面白き事よ。現れるはずのなき精霊の降臨……これは新たな運命への道標かつ！」

「謝罪。耶俱矢の物言いが分かりづらくてすいません。耶俱矢はただ驚いているのをごまかしているだけです」

「ちよつとお夕弦う!!　あつさり片付けないでくれる!!」

「……まあ、みんなの驚きは確かよね。私も驚いているし。というか今までへフラクシナスは何の感知もできてなかったわけ？　だったとしたらより謎ね……」

みんなが思い思いの言葉を放つ。大所帯なせいで、それだけでとても賑やかだな、と華恋は思った。

「うーん、確かにこの世界にもういないはずの精霊が出てきたら驚きよね。みんなの動揺、分かるよ」

わいわいと騒ぐ元精霊達に、華恋は苦笑いをしながら言う。

「ええ、その動揺を抑えるためにも、今度はあなたが自分はどういう存在か説明してくれるかしら？　少なくとも、あなたに敵対する意思はない。そうよね？」

「うーん、したいのはやまやまんですけど……」

琴里の言葉に再度困ったようにはにかむ華恋。そこで、土道はあることを思い出し、口にする。

「あ、確か華恋、記憶がないんだっただか……？」

「そうなの？」

「……うん、そうなんだよ」

琴里に確認され、華恋はバツが悪いと言った様子で言う。

「自分が精霊であったことは思い出したんだけど、その他のことは全然思い出せないんだ。なんというか、思い出そうにも思い出せないというか、記憶に鍵がかかっているみたいというか……」

「むん……まるで主様に最初会ったときのむくみたいじゃの」

「そうなの？ だったらこの思い出せなくて気持ち悪い感覚、少しは分かるかな。本当に、全然思い出せないんだよ。思い出せる事と言えば自分が精霊だったことと、戦い方、後は……そう、〈ゴースト〉なんて呼ばれ方をしていた事ぐらいからな」

「〈ゴースト〉……聞いたことのない識別名ね。マリア、一応聞くけど〈ゴースト〉という名はデータにある？」

琴里が言うと、彼女の脇から小柄な少女が現れた。〈フラクシナス〉のAI『MARIA』が対人コミュニケーション用のボディを持った姿である。

その事を知らされたとき、華恋はやはり驚いたものだった。

「いいえ琴里、そのような識別名は過去一度も登録されていません」

「ASTに居た頃も、そのような識別名は聞いたことがない。つまり、彼女はこの世界の出身ではないと考えるのが妥当」

「ふむ……やはりそうなるのね」

眉に皺を寄せながら、口に啞えたチュツパチャップスの棒を握る琴里。

その様子を、華恋は申し訳ないような表情で見ていた。

「ごめんね、なんか私の事で苦勞をかけて……」

「いや、いいのよ。精霊の事で苦勞するならヘラタトスク〈はいくらでも背負い込んでやるわ。それが、私達の役目ですもの」

「はあ……」

華恋はいまいち実感がわかなかった。

精霊は世界に対する厄災。それを打倒ではなく救うとは、酔狂な組織であると思っただのだ。

「となると……やつぱり、並行世界からやって来たってことなのか？

過去の、あの十香のように……」

そこで、士道が言う。その言葉に、華恋は関心を引かれた。

「えっ？ それってどういう？ 十香が、別世界から……？」

「ああ、ここにいる十香のことじゃなくて、別世界の十香の事なんだが……後で説明するよ。ちよつと込み入った話だからな」

「ふーん……ま、士道がそう言うなら。それよりもさ、これから私、どうなるわけ？ そこんところちよつと知りたいんだけど……」

「そうね……」

聞かれた琴里は、口からチュツパチャツプスを抜き、じつと華恋を見る。

「以前なら、士道に霊力を封印してもらって、私達の庇護下に入ってもらったのだけれど、あいにく今の士道にその力は無いわ。そうよね、士道」

「ああ……別世界の十香と口づけをしても、霊力は封印されなかった。でも霊力が繋がる感じはしたから、完全になくなったわけじゃないと思う」

「と、そういうことなのよね。だから、私達にできることは現状のあなたを精一杯サポートしてあげることぐらいよ。もちろん、記憶が戻るようにこちらでできることはするつもりだけれど」

「なるほどね……それじゃあ、つまるところ私は普段通りの日常に戻っていいってことだね？」

「ま、そうなるわね。ただ、その点で気になるのはあなたを襲った存在ね。あれがまたいつ襲ってくるかもわからないし……」

「ああ、それなら大丈夫だよ」

と、心配そうな顔をする琴里に、華恋は言った。

「え？ 大丈夫って？」

「私の天使、シエムハザへ支配皇帝」は万象を支配、操作する天使。それによって、次元の壁に穴が空かないように、操作したから」

軽い口調で言う華恋。だが、琴里や土道は、その天使の権能に驚きの色を隠せなかった。

「万象を支配、操作ですって……!? これはまた、敵に回したくない力ね……」

「ハハ、大丈夫。私もみんなを敵にしようだなんて、思っていないよ。平和が一番、だからねっ!」

そう言つて華恋はピースをして見せる。

「おお、そうだな! 私もそう思うぞ!」

それに、十香が笑つて返す。

「だよね! さすが十香、話が分かるっ!」

同じように笑つて返す華恋。

にっこりとした笑顔をする彼女達に、土道は「はは……」と笑つた。

「お、どしたの土道?」

「いや……華恋はやっぱ、華恋だと思つてさ」

「なにそれ。ふふふ、私は私だよ。それにしても土道、やっぱプレイボーイなんだね。ここにいるみんなとキスしたなんて、ちよつとびっくり」

「え!?! そ、それは……」

「はは、照れちやつてもう。あ、そうだ。さつき思い出した事だけど、もう一つあったよ。あんまり関係ないしちよつと恥ずかしいと思つて言わなかったけど、土道のプレイボーイさを知ったからこつちもオマケで教えちやう」

「プレイボーイさって……」

「何? 何でも言つてちょうだい。どんな僅かな手がかりでも、あなたの過去に繋がることなら、少しでも知つておきたいわ」

琴里が少し前のめりになって聞く。他の面子も興味津々と言つた様子だった。

その空気の中、華恋は少し赤面しながら、言つた。

「私……その……ちゃんとは思ひ出せないんだけど……好きな人が、

精霊と元精霊

「ふう……」

華恋はすっかり日が暮れた街の中、帰路についていた。

彼女の横には土道がいる。二人共少し疲れた表情をしていた。

「まさかあんな質問攻めにあうとは……」

「ははは……お疲れ」

華恋の「好きな人がいる」発言は思った以上に元精霊達に衝撃をもたらしたようだった。

想い人について、華恋は元精霊達から代わる代わる質問を受けたのである。

だが、華恋の答えは一つだった。

「覚えていない」と。そう、華恋は想い人がいることしか覚えておらず、それ以外は何も思い出せない状況だったのだ。

そうと分かると、矢継ぎ早に質問をしていた元精霊達は少し申し訳無さそうな顔をしたが、彼女はまったく気にしていないと軽く流した。

その後、今日はこれまでとなり、華恋は帰路につくことになった。

琴里は家の前に転送すると言ったが、華恋は「ちよつと歩きたい」という理由でそれを断り、元の場所に戻してもらった。

「にしても、土道までついてくることなかったのに」

そんな華恋に、土道はついていっていた。土道が言い出したときは少しびっくりした華恋であったが、それを断ることはなかった。

「いやなんか……俺もちよつと歩きたくてさ。どうせなら一緒にと思っただよ」

「ふうん、さすがプレイボーイ、それで数々の女の子を落としてきたってわけか」

「おいおい……」

「ふう、冗談だよ」

華恋はいたずらな笑みをしながら言う。そして、半歩前に出て土道に手を組んだ背中を見せる。

「大丈夫だよ、ちゃんと士道が私の事気遣ってくれてるの、伝わってるよ」

「はは……まあ、そんなところだな。一人の方がいいかなとも思ったんだが、やっぱりどうしてもこうして二人で話したくて、な」

「……うん。ありがとう士道。やっぱり一人より二人、だね。こうして軽く話すだけで、大分気が楽になるよ」

「華恋……」

士道が少し心配そうな声を出す。そんな士道に、華恋は軽く振り返りながら言った。

「そんな声出すなって。大丈夫、私は元気だよ。ただ、まだちよつと自分自身にびっくりしているだけでさ。気になさんな、明日にはすつかり元通りの華恋さんさ」

「……無理はすんなよ。俺達は、いつでも相談に乗るぞ」

「……ほんと、優しいね士道は。ありがと」

それから少しして、二人はとりとめのない会話をしながら歩いた。あの授業の教授はどうだとか、大学の学食のコスパはどうだとか。そんな普段と変わらない会話を最後までして、その日二人は別れたのだった。

「で、どーなのよ実際」

「えっ？」

五河家。

家に帰った士道は、琴里にそう聞かれた。

琴里はソファーに座りニマニマとした顔で士道を見ている。

「どうって……華恋の事か？」

「そ。二人で話したんでしょ？ どうだったのよ、なにか気づいた事とかあった？」

「何かって……何にもないよ。精霊であることを思い出しはしたけど、あいつは皇華恋に変わりにない。ただの、俺の友人だよ」

「ふーん、それにしても仲よさげに歩いてたじゃないの、プレイボーイ」

「おいおい……」

「冗談よ。私も話して彼女が悪い人じゃないのは分かったわ。でも同時に、今の私達には制御できない力を持っていることも忘れちゃいけない」

「ああ……分かってるよ」

士道は応えながら自分の右の手のひらを見、何度か握って開いてを繰り返した。

琴里も先程のからかうような顔をやめ、真面目な表情で彼を見ている。

「ヘフラクシナスでも話したけど、今の士道に精霊を封印できる力がある可能性は低いのは、並行世界の十香の例で証明済みよね。ただまあ、それが並行世界の十香が特別という可能性も捨てきれないけど」
「ああ、俺はまだあいつの力を封印してやれるかもしれない。ただ……」

「そうなのよねえ。彼女、意中の相手がいるのよねえ……」

琴里がうーんと唸りながら腕を組む。眉も八の字にして本当に困ったといった様子だ。

「さすがに好きな相手がいる精霊は初めてよ。そんな相手を無理やり攻略しても精霊の幸せには繋がらないだろうし、どうしたものかしらね……」

「ああ、だよな……俺達に今できることと言えば、やっぱり昔の事を思い出すのを手伝うぐらいしかないんじゃないか？」

「そうね……あと彼女の生活のサポートね。一応、今まで一人でうまく生活してきたみたいだけど、彼女も精霊である以上は庇護対象。〈ラタトスク〉が力を貸さない理由はないわ」

「だな。しかし、一体どんな奴なんだろうな。あの華恋が好きな相手ってのは……」

二人で華恋の想い人に対して想像を巡らせ始めた、そのときだった。

「シドー！ 帰っていたのか！」

元気な声が、後ろから響いてくる。十香だ。

その後ろには二亜、四糸乃、七罪、六喰もいる。

「やー少年！ 遅かったねえ！ 私もうお腹ペコペコだよー！」

「おかえりなさいです、士道さん」

『やつほー士道くん！ んん？ お取り込み中だったかなあ？』

「難しそうな顔してるわね。あの新しい精霊絡みでなんかあったの？」

「むん、何か悩み事があるなら話を聞くぞ、主様。妹御」

一気に騒がしくなる五河家リビング。その様に、士道は思わず笑ってしまう。

「ハハ、いや何、それほどって事でもないよ。それより、他の面子はどうした？」

「ああ、狂三は今日は一人で食べたと言って、耶俱矢と夕弦はなんか謎の対抗心を燃やして料理勝負、美九はこれからアメリカでレコーディングのために小型艇に、折紙は……なんか負けていられない、食材を買い込むって商店街に消えていったわ」

「そうか……最後の折紙だけは絶対言葉通りの意味じゃないな……」

七罪の説明に顔を引きつらせる士道。

そんな士道に、七罪と琴里は同情的な視線を向けていた。

「士道、大丈夫か？ 疲れているのか？ もしそうなら、私が代わりに夕餉を作るぞ？」

「え？ ああ、大丈夫だよ十香。ちょっとこれからの事を考えて退屈しなさそうだなって思っただけさ」

「ん？ そうか……とは言え、やはり私も手伝うぞ！ 今日の士道は襲われて大変だったそうだからな！」

「あ、だったら私も手伝います。私も最近、お料理を勉強していて……」

「四糸乃が手伝うなら、私も……まあ、誰も私の作ったものなんて食べたくないだろうから、私が自分用に作るだけだけど」

「む、皆がやるなら六喰もやらねばなるまい。料理は下手ではないと思うが、上手とも言えぬのでどうかご指導頼むぞ主様」

「ここら、そんな人数台所に入れるわけないでしょ。せめてじゃん

けんで決めなさい」

「そうだよー？　だから私は慎みを覚えて食べる側に回るのであーる！」

「いやこはお前も乗っておけよ二亜……」

ツツコミながらも楽しげに笑う土道。

とても心地よく、穏やかなぬくもり。

濃密な期間を経て勝ち取ったこのぬくもりに、華恋も混ぜてやりた
い。ふと、土道はそんなことを思うのだった。

「そうだシドー。一つ考えがあるのだが……」

「ん？」

そんな折、十香からある提案が上げられるのであった。



「やあ土道。どうしたんだい昨日の今日で」

翌日。土道は華恋の家を訪れていた。彼女の部屋は学生が多く住
むいわゆる学生マンションにあった。住所は昨日別れたときに知る
ことができたため、彼が迷うことはなかった。

「ああ、実はお前にちよつとした提案があつてな」

「提案？　まあいいや。中に入りなよ」

土道は華恋に案内され彼女の部屋に入る。

彼女の部屋を見て、土道は軽く見回す。生活必需品の他には、
ちよつとしたクッションや本が置いてある、普通の部屋だった。

強いて言えば掃除があまり行き届いておらず、モノが散乱気味だと
言うことぐらいだろうか。

「あー散らかっちゃってるね。まあ適当に片付けるから適当に座りな
よ」

「お、おう」

土道は言われたままに彼女がテーブル前に作った空きスペースに
座る。

そして、そのテーブルを挟むように華恋も座った。

「で、どうしたんだい。こんなすぐ私に会いに来たってことは、精霊としての私に会いに来た、ってことでしょ？」

「……まあ、そうなるな」

ポリポリと頬をかきながら言う土道。その様子に、華恋はテーブルの上に肘をつきながら笑顔を見せる。

「うん、素直でよろしい。でも、一体どうしたの？ ヘラタトスクって機関は私をできる限り支援してくれるって話にはなったけど」

「ああ、そうだな。でも、俺にも……いや、俺達にもできることがあるって、気づいたんだ」

「俺、達……？」

華恋が不思議そうに聞く。そんな彼女に、土道は力強く頷く。

「ああ、華恋。これから数日の間、俺と、そして元精霊達と、デートをしないか？」

「……へ？ デート？」

土道の言葉が意外すぎたのか、華恋は鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしてしまう。

だが、対して土道の表情は真剣そのものだった。

「ああ。俺達が、普段どんな生活をしているのか、それを華恋にじっくり欲しいんだ。そうやって、普段と違う生活を送れば、もしかしたら記憶が蘇るかもしれない。そう思ったんだ」

「な、なるほど……しかし、にしたって急だね？」

「ああ、事は早いほうがいいだろう？」

「……ふふつ、まあね」

華恋は土道の言葉に、面白いと言ったように笑う。

「おつ、乗り気になってくれたか？」

「ああ、とても楽しそうだ。他の元精霊にも興味があるし、土道がたくさんの女の子とどう生活しているかも気になるしね」

「ははは……まあ、そこはな」

ちよつと困ったように笑う土道。そんな土道に、華恋はニヤニヤとした表情を見せる。

「ふふつ、まったく隅に置けないねえ。今回の事も、土道が考えたのか

い？」

「いや、発案者は十香だよ。純粹に、お前にみんなを紹介して、歓迎したいんだとさ」

「なるほどね。十香らしいや。それじゃあ、土道の言う通り事は早いほうがいい。さつそくスケジュール調整といこうじゃないか。誰が最初に私とデートしてくれるんだい？」

「ああ、それはだな——」

こうして、土道と元精霊達の、華恋との風変わりなデートが始まるのであった。

四七ゲーミング

「さて……ここがいわゆる精霊マンションってやつなんだね」

士道達とデートをすることになってから一週間後。

華恋は五河家の近くにある、精霊マンションに来ていた。約束通り、士道を含めて精霊たちと交流をするためだ。

もちろん、側には士道も一緒だ。

「ああ。正確には『元』だけだな」

「分かってるって。えっと、今日一緒に過ごすのは……」

「四糸乃と七罪だな」

「ああ、そうだったね。あのパペットをつけた子と、ちんまい子」

「ははは……後者は本人には言うなよ？ 七罪、そういうところ気にするから」

「ん、分かった」

士道に言われ華恋は軽く頷く。

彼女はその後士道に案内されて精霊マンションを案内される。

精霊マンションと言うから普通のマンションと違うのかと思っただが、案外自分の住む学生マンションと変わらないと、華恋は思った。

「さ、ここだ」

エレベーターで少し上がったところで降りた士道は、とある部屋の前で止まる。

そして、その部屋のインターホンを押す。すると少しして、ガチャリと扉が開けられた。

「あ、士道さん……！ それに、華恋さん……おはようございます」

『やつほー！ 士道君に華恋ちゃん！ いい朝だねえー！』

「……おはよう」

出迎えてきたのは当然四糸乃とよしのん、そして七罪だ。四糸乃は笑顔で、七罪はわずかに仏頂面である。

「ああ、おはよう」

「どうも、おはよう。今日はお世話になるよ」

士道に続いて華恋も軽く手を振って挨拶をする。そんな彼女に、四

糸乃は可愛らしく「はい！」と返事をしたが、七罪は黙ったままだった。

「うん？ どうした七罪。なんだかいつにも増してテンション低いな」

そんな七罪の様子を察してか、士道が聞く。

「……いや、記憶喪失の精霊の記憶を取り戻すっていう大切なデートに、私がいてもいいのかなって……私、邪魔にならない？ なんなら士道と四糸乃との三人のほうが潤滑に進まない？ というか、出迎えるのが私の部屋でいいの？ 四糸乃の部屋のほうがずっと楽しいと思うわよ？ うん、今からでも四糸乃の部屋に……」

「七罪さん」

少し暗い顔で言う七罪の顔を、四糸乃が優しく撫でた。それに、七罪がドキリとした表情になる。

「私は七罪さんと一緒にお出迎えしたかったです。それに、七罪さんの部屋にしたもの、七罪さんの部屋には楽しいものが沢山あるからだと思います。だから、自信を持ってください」

「……うん……四糸乃がそう言うなら……」

頬を赤らめながら言う七罪。

そんな二人の様子に、華恋はニツコリと笑う。

「ふふ、二人は凄く仲がいいんだね」

「はい、七罪さんと私は仲良しです」

「……う、うん」

『ふーん、二人の仲を見抜くなんて、華恋ちゃんいい目持ってるねえー！』

よしのんが明るく言う。それに、その場にいた全員が笑う。

「ははっ、そうだな。二人は仲良しだもんな」

「う、うう……否定はしないけど恥ずかしい……！」

「まったく、いきなりこんなお熱い二人を見せられると妬げちゃうねえ。私達もイチャイチャするかい、士道？」

「は!?! いやいや何言ってるんだお前……」

「おや、乗ってくれないのかい？ 残念」

「お前なあ……」

「ふふふ、それでは、こちらにどうぞ」

話もそこそこに、華恋は七罪の部屋に上げられる。部屋は綺麗に掃除が行き届いており、しっかりと客人をもてなす用意ができていた。「えつと、みなさんで色々話し合っただんですが、私達は七罪さんの部屋でいっぱい遊んでみようってなったんです」

『つまり、七罪ちゃんの部屋でダラダラゲームでもしようって事だねえ』

「へえ。てつきりデートなんて言うから街でブラつくのかと思ったけど、意外なアプローチだね」

「……そういうのは他のが担当するから。私達は、一緒に遊んでみようってなって……順番はくじ引きだったけど」

「ふうん？ ま、そのときはそのときで楽しみにしておくよ。今回はみんなで遊ぶのを楽しませてもらうかな」

「そうだな。なにげに俺もこうして遊ぶのは珍しいかもな」

「おや、そうなの土道？ なんか意外」

『土道君はいつも沢山の女の子に囲まれてるからねえ。こうして少数で遊ぶってのは案外ないんだよねー』

「へえー……さっすがあ」

よしのんの言葉に華恋はニヤリと笑いながら横目で土道を見る。

華恋のその視線に、土道は軽く苦笑いをする。

「はは……まあ、結構な大所帯だから今の俺達。だから、こうして少ないメンバーで遊ぶのは確かに久々で新鮮なところはあるよ」

「なるほどねー。じゃ、存分にその時間を楽しませてもらうかな。最初は何で遊ぶんだい？」

「そうね……最初はこれとかどうかしら」

そう言っつて七罪はテレビの横に歩いていき、とあるものを持ち出す。それは、ゲーム機だった。

「まあ最初は無難にみんなテレビゲームでも、とか思うんだけど……ダメ？」

「いや、いいと思うよ。むしろ、ドンと来いだよ！ 私、ゲーム好きだ

し」

「お、華恋も案外やる口だな？ いいな、ちょうど四人いるし、いろいろなゲームが楽しめそうだ」

『ふふーん。まあどんな勝負も四糸乃が勝っちゃうと思うけどねー？』

ボクと四糸乃のタッグは最強だよー？』

「もう、よしのん……！ そ、その、自信はないけど、頑張ります……！」

「私は……まあ頑張るわよ。あんまり勝てる気しないけど」

こうして、四人でのゲームが始まった。

最初に始めたのはレースゲームだった。それぞれがコントローラーを握り、テレビ画面に集中する。

「はっはー！ 私に追いつけるものなら追いついてごらんー！」

「おっ、やるな華恋！ さてはお前、やり込んでるな!？」

『むむ……！ 四糸乃、諦めちゃダメだよ！ まだまだチャンスはあるよー！』

「う、うん……！」

「……えいっ」

「あーっ!? 七罪ちゃんが使ったアイテムでみんながコースアウトしたー!? なんて的確なタイミング……！」

レースゲームは白熱し、かなりの試合数がこなされた。

結果、それぞれ勝利数がほぼほぼ同数になるぐらいには数がこなされた。

「ふうー！ 楽しかったねー！ そろそろ別のやる？」

「そうだな……七罪、他に何かソフトあるか？」

「うん、まあ。みんなで遊ぶように買った奴が……あ、あったあった。これ。パーティゲーム」

「へえー楽しそうじゃん！ やろう、七罪ちゃん！ 四糸乃ちゃん！」

「はいっ……！」

『今度こそ四糸乃が圧倒しちゃうよー?』

そうして始まったパーティゲーム。

これまた四人は熱中し、画面に釘付けになった。

「ぐぬぬ……！ 総資産は四糸乃ちゃんが一位……！ プレイングもそうだけど、なんたる強運……！」

『ひゅー！ さすが四糸乃！ このまま一位を突っ走っちゃおうー！』

「う、うんよしのん！」

「おっと、そう簡単にはいかないぜ！ もうちよつとで俺が逆転を……！」

「……そりゃ」

「おおっ!? 七罪!? なんで俺に妨害アイテム使うんだよ!?」

「えっ、だって四糸乃にそんなことできるわけないし……だったら狙うのは二位の士道に決まってるじゃん」

「理不尽な!?!」

「あ、だったら私も便乗して。士道の資産貰うね」

「ぐおー!? 華恋お前ー!?!」

そうして盛り上がったパーティゲームでは、最終的に四糸乃が一位になり、二位に七罪、三位に華恋、そしてドベが士道という形になった。

結果に喜び、悔しがる面々。

その後も、四人はテレビゲーム以外にもゲームに興じた。

女子三人が体を絡め合うツイスターゲーム。

「えーと、青に左手」

「ぬんっ……！」

「おおっ、華恋の胸が私の顔につ……!? ぐぬぬなんでこんな大きいのよ……！」

『士道君も混ぜればよかったのにー。なんで回す係になっちゃうかなー?』

「いや俺が参戦したらいろいろまずいだろ!?!」

「……でも、ちよつと参加して欲しかったです」

「四糸乃っ!?!」

いろいろなルールで行われたトランプ。

「今しかないっ！ 革命っ！」

「はい、革命返し」

「なっ、狙っていた、だと……!?!」

「七罪はそういうしたたかなところあるよな」

「さすがです、七罪さん……!」

「……う、ま、まあね……」

「私の手札がゴミがばっかなんだけどー!」

とにかく四人は遊んで、遊んで、遊び倒した。

そうしていくうちに、あっという間に時間が流れていった。

「ふう……さすがに疲れたね。ちよつと休憩にしない?」

華恋が言う。時計を見ると、お昼を大きく過ぎていた。

「お、もうこんな時間か。楽しい時間はあっという間だけど、さすがに腹が減ったな……七罪、台所借りていいか?」

「ええ、いいわよ。食材も自由に使っていいわ」

「ありがと。じゃあ適当に何か作るよ」

そう言って土道が外す。残った華恋、七罪、四糸乃の三人はソファーに座って土道の料理を待つことにした。

「いやーそれにしても遊んだねー。こんなに遊んだのはいつ以来だろうって感じだよ。ま、私記憶ないからいつ以来も何もないんだけどね」

「軽い感じで重い事言うわね……」

『やーんヘビーブロー』

「ははは、ごめんごめん。にしても、随分と遊び道具を持ってるんだね」

「……実は、ああいった遊び道具買ったのはここ一年の事なんだ」

「え? そうなの?」

七罪の言葉に、華恋は意外そうに反応する。

そんな彼女に七罪は小さく頭を縦に振る。

「うん……もともと私、こうやってみんなで遊ぶのは苦手だったんだよね……どうせ仲間外れにされるとか、そんなこと考えちゃって。でも、土道や四糸乃達がそんなことないって教えてくれて……だんだん、私もみんなと一緒にいたいって思うようになって……それで、い

つの間にかこうしてみんなで遊べるものが増えていった、って感じかな」

「へえ……」

「七罪さんは、本当にいい人なんですよ。ね、よしのん」

『うん！ 七罪ちゃんのおかげで、よしのん達も楽しく遊べてるもんねー！ 今ではよくみんなが遊びに来るんだよおー！』

「……昔は人と関わるのすら嫌だったけど、今では、さつきみたいに真剣勝負するの楽しいなって、そう思えるようになったかな」

「……そうだね」

それに、華恋は優しく相槌を打つ。

「楽しめる真剣勝負って言うのは、いいもんだよ」

そして、少し上を向きながら言う。

「お互い健全に、全力でぶつかり合うといつしか心が通い合うからね。スポーツとかもそうだけど、ある種の心地よさがあるんだよ。前に私も……あれ？ 私も……？」

そのとき、華恋の頭にある感覚がよぎった。

今まで忘れていた感情と感覚が、脳内に急に到来したのだ。

「私……そうだ……あの人と、こうやって勝負を……」

華恋はそう言いながら上半身をぐらつかせ、長い髪を揺らしながら前に倒れ込みそうになる。

それを、なんとか片手で頭を抑えることによって防ぐ。

「え？ ど、どうしたの!？」

「大丈夫ですか……!？」

その様子を見て、動揺する七罪と四糸乃。

二人の心配する顔を見て、華恋は少し苦しそうではあるが笑顔を作る。

「うん、大丈夫……ははは、まさか本当に……」

かすれる声で笑う華恋。そこに、皿を持った土道がやって来る。

「おう、とりあえずトーストに目玉焼きを……って、どうしたんだ、華恋？」

「ああ、土道……どうやら私、本当に記憶が一部蘇ったようなんだ

……」

「えっ!? 本当か!? どんな記憶だ!？」

急いで皿を置いて聞く土道。

そんな土道に、華恋はゆつくりと上半身を起こし、額にかいた汗を拭って言う。

「ああ……どうやら私は、私が好きだった相手と、真剣勝負をした事がある……ようだ。具体的な風景というわけではないけど、そのことをぼんやりと思い出したよ」

「そうか……つまり、こうして一緒に過ごしていけば……」

「ああ……本当に、私の記憶が戻るかもしれない」

華恋はニヤリと笑いながら言う。その様子に、土道、四糸乃、七罪は嬉しそうな顔を見せる。

「記憶が戻って、良かったです……!」

『そうだねー! この調子で頑張っていこうね華恋ちゃん!』

「悪い記憶じゃないようで何よりだわ……私はたまにこう嫌な想像がフラッシュバックすることがあるけど」

「ああ、まず一步、という感じだな!」

「うん、ありがとう、みんな……」

こうして記憶の一部を取り戻した華恋。その日は、その後昼食を食べ、少しまた遊んだ後に帰ることになった。結局、その後また記憶が戻ることはなかった。

「それじゃあ、またね」

華恋は精霊マンションの前まで見送りに来た四糸乃と七罪にそう言っって手を振る。

「はいー」

「……………」

そんな華恋に四糸乃はニッコリと返す。七罪は相変わらず仏頂面だったが、内心はちゃんと友好的な気持ちでいてくれていることを、華恋は感じ取っていた。

「記憶……これからも戻ると良いわね」

その証拠に、七罪は別れ際にそう言った。

華恋の事を思ってくれているのが、しっかりと伝わってきた。

「うん、ありがとう七罪ちゃん」

だから、華恋もしっかりとお礼を返す。彼女の気持ちに、心から応えたかったからだ。

「それじゃあな、華恋。また今度」

「うん、士道。また今度」

そして、玄関でまた士道とも分かれる。士道はまた家まで送ると言ったが、それだと士道が大変だろうと華恋は断った。

そうして一人の帰り道に行くことになった華恋。

「……楽しい記憶、思い出せてよかった」

彼女は、夕暮れを見上げながら、静かに笑みを作るのであった。

「うむ！ 今日は何分に楽しむとよいぞ！」

「請願。ただしお触りはなしの方向でお願いします」

「うん……？ ねえ士道、今日は何するの？ イマイチ話が見えないんだけど……」

「ああ、そういやまだ言っていないかったな。今日は——」

「今日は！ 耶俱矢さんと夕弦さんのコスプレ対決撮影会ですう！」

士道の言葉に割って入るように、美九が言った。

「コスプレ対決!？」

その言葉に、華恋は目を丸くする。

「まあ最初は驚くよな。耶俱矢と夕弦はよく色んな方法で勝負してるんだが、今日は華恋とのデートついでにコスプレ勝負をすることになったらしくて……そしたら、美九がその写真を撮りたいって言うってな」

「はいいい！ 美少女双子の耶俱矢さん、夕弦さんの美しい衣装をシャッターに納められるチャンスなんてまたとないですからあ！ いやあ楽しみですねえ！」

「な、なるほど……それは確かに面白そうではあるけど……」

苦笑いしながら頬をポリポリとかく華恋。

「なんだか変なノリに巻き込まれたな、というのが彼女の正直な感想だった。」

「まあ一緒に来てみるよ。二人の対決見るの、案外楽しいもんだぜ？」
「ふうーん……ま、士道がそう言うなら」

華恋は士道の言葉に頷く。

まだイマイチ二人の勝負というのにピンとこない華恋だったが、士道の言葉だし信じてみようかと、彼女は思ったのだ。

「それじゃ、出発でーす！」

美九が音頭を取る。一人だけ異様にテンションが高い美九に、他の四人は思わず笑ってしまうのであった。

「というわけでやって来ましたコスプレ専門店！ いやーいろんな衣装がありますねえ！」

天宮駅からしばらく歩いた面々は、ついに目的地であるコスプレ専門店へとたどり着く。

そこには沢山の衣装が所狭しと並べられており、ある種の感動を華恋に与えた。

「おお……こういう店初めて入ったけど、凄いいもんだねえ」

「だな……しかし本当になんでもあるな天宮市……」

隣で土道が頷きながら言う。

二人はすっかりコスプレ専門店の独特な雰囲気飲み込まれていた。

「さあそれでは勝負開始です！ お二人がコスプレを選んで着たところを私が写真に撮り、だーりんと華恋さんが審査します！ 三本勝負で二本取ったほうが勝ちですう！」

「え？ 私も審査員なの？」

美九のルール説明に驚く華恋。

一方で、美九も八舞姉妹も当然と言った顔をしている。

「そうですよお？ だって、審査がないと勝負にならないじゃないですかあ」

「依頼。できるだけ客観的な意見が欲しいので華恋にも審査をお願いしたいのです」

「ククク、その曇りなき眼による厳正な天秤によって我らの勝敗を見定めて欲しいのだ……」

「ま、ここまで来たんだ。諦めて俺と一緒に審査員になってくれ」

「ふむ……分かった。でも、私の目は厳しいよ？」

諦めたように笑いながらも、声音は楽しそうな様子で答える華恋。

華恋がそう答えると、八舞姉妹は嬉しそうに笑う。

その顔を見て、華恋は提案を受け入れてよかったと、ほっとした気持ちになった。

「ではそうと決まればさっそくレディ、ゴーですー！」

美九が腕を大きく上に突き上げて言う。

その言葉と同時に、八舞姉妹は消えるような速さで服を取りに行つた。

「速っ!?!」

思わず口にする華恋。

そんな驚きを示しつつも、華恋と土道、そして美九は一応の審査会場となる専門店にある撮影スペースへと向かう。

すると、そこにはなんと既にコスプレ衣装に身を包んだ八舞姉妹がいたのだ。

「えっ、もう!?!」

「ふふふ、これこそ神速の八舞姉妹の本領よ」

「自信。八舞の速さは宇宙一です」

そうやって誇る八舞姉妹の姿はそれぞれ対照的だった。

まず耶俱矢だが、黒いコウモリのような翼を背中に生やし、同じく黒い布を体中に巻きつけている。そして、首や腕に銀色のアクセサリーを大量につけている。

「フッフ……墮天使、ここに降臨! 天より墮ちし黒き影の姿、とくと見よ!」

とても楽しそうに言う耶俱矢。

対して、夕弦の姿は、全身白だった。白い祭服に、たかだかとした角張った帽子——ビレッツタ帽を被っている。そして右手にはどうやら聖書が。どうやら司祭のようだった。

「静粛。厳かな司祭とは夕弦の事です。どうですか、土道、華恋、美九」
「きゃああああああああああ! 二人共素敵ですうううううううううううううう!」

さっそく二人の姿をバシバシと撮影する美九。

様々な角度から撮影するその動きはともすばしっこく、八舞に負けないのではないかと華恋は思ってしまう。

「うーん……どう思う? 土道?」

「そうだなあ……せーので指差すか。せーの……」

ビツ、と、二人が指差す。

二人が示したのは、夕弦だった。

「勝利。今回は夕弦に軍配です」

「ええー!?! なんでよー!?!」

夕弦がしたり顔で言い、耶俱矢が不満げな表情で言う。

「いやだつてなあ……コンセプトが一目で分からないからな耶俱矢は」

「そうだよな。趣味に走りすぎて肝心のコスプレがとっちらかっている感じ」

「うぐっ……！ それは……！」

耶俱矢が痛いところを突かれたといった表情をする。一方で、夕弦は余裕の笑みだ。

「噴飯。耶俱矢はまずコンセプトを理解するところから始めるべきですな」

「むきーっ！ 言ってくれるじゃないの！ 次いくわよ次！」

耶俱矢がそう怒りながら、対して夕弦は相変わらず余裕と言った表情で撮影スペースを出る。

そして待つこと数分。次の衣装に着替えた二人が出てきた。

「さあ、次はどうよっ！」

勢いよく言う耶俱矢。耶俱矢の恰好は、警察の制服に身を包んだ、婦警姿である。しかもスカートがなかなか短い、ミニスカポリスである。

白磁のような肌の太ももがしっかりと見え、扇情的である。

「お、おお……」

その姿に、土道は少し顔を赤らめていた。

「ほーう？」

彼のそんな表情に、華恋は不敵な笑みを作る。

「照覧。夕弦も見てください」

そう言う夕弦の恰好は、黒い着物に十手を抱えている。どうやら岡っ引きのコスプレのようだった。

腕を組みながら十手を構えるその姿は、なかなかの様になっていた。

「きゃあああああああ！ 耶俱矢さんはエッチですし夕弦さんはかっこいいですううううう!! シャッターチャンス!!」

そして、そんな二人をまたもバシヤバシヤと撮影する美九。

一方で、二人は考える。今度はどっちを選ぼうかと。

「士道はどっちがいいか決めた?」

「うーん悩むけど、一応な。華恋は?」

「私も決めたよ」

「そうか、じゃあ今度もせーので指差そう。せーの……」

二人の指は今回も同じ相手を指差す。今回指差したのは、耶俱矢だった。

「愕然。なぜですか」

「え? やったー! じゃなくて……ククク! これこそ運命の導きよ……!」

「いや、夕弦の岡っ引きも良かったけど、ストレートに来た耶俱矢の方も良かったなって。その点、今回の夕弦はちよつと変化球だったしな」

「士道、耶俱矢に鼻の下伸ばしてたもんねえ」

「なっ!? 伸ばしてねえよ!」

華恋に言われ焦る士道。

対して、今度は耶俱矢が勝ち誇るような笑みを浮かべ、夕弦が悔しそうな表情をする。

「フッフッフ、どうやら天は我に味方したようだ。ならば次は……」

「遺憾。そうとなれば次は……」

そして、またも二人は素早く撮影スペースを後にする。

また数分が経ち、同時に二人が現れた、のだが――

「なっ!? なんでそんな恰好してるんだお前ら!」

士道の悲鳴にも似た叫びが響く。

それもそのはずで、二人はなんと水着姿で現れたのだから。

「えっ!? なんで夕弦水着姿なのよ!」

「疑問。そういう耶俱矢こそ」

「いや私はこうした方が有利かなーって……」

「同意。夕弦も同じです」

耶俱矢が黒、夕弦が白の違いはあれど、二人共なかなか際に際どいビキニを着て現れていた。その恰好に、士道は顔を赤くし驚いている。

「それもうコスプレじゃないだろ！」

「私はウエルカムですよー！ 水着姿のお二人、最高ですよー！ 激写！」

「うーん、これはさすがにレギュレーション違反でドロークしら」
撮影する美九の横で華恋が言う。その言葉に、耶俱矢と夕弦は口を大きく開ける。

「ええー!? じゃあ今回総合的に引き分けてことー!?」

「悔恨。残念です」

悔しがる二人。そんな二人を見ながら、ハハハと笑う華恋と土道。であったのだが、いつしか耶俱矢と夕弦の視線が三人に向いていた。

「……ん? どうしたお前ら?」

土道が聞く。すると、二人は目を輝かせて言った。

「クツクツク、ここで姿を変えるのが我らだけでは面白くないと思つてな」

「刮目。華恋もなかなかコスプレが似合いそうな見た目をしています」

「え? 私も?」

悪い顔をして三人ににじり寄る八舞姉妹。

いつの間にか、彼女らの手にはコスプレ衣装が握られていた。

「というわけで……」

「宣告。覚悟してください」

「う、うわーっ!」

「あーん大胆ですよー!」

「わ、私までえ!」

そうして三人は耶俱矢と夕弦にもみくちやにされながら更衣室に連れて行かれていく。そして――

「おおっ! 三人ともよく似合ってるじゃん!」

「満悦。会心の出来です」

現れたのは、衣装を新たにした三人だった。
まず華恋。

彼女がさせられたコスプレは、旧陸軍の軍装だった。カーキ色の軍服に、マントを羽織り、軍刀を腰に挿して、長い髪を後ろでまとめている。

「ははは……そう？ 似合う？」

その姿はとても様になっていた。

次に美九。彼女がさせられたのは医者 of 服装だった。白衣を纏い、聴診器を首から下げている。中には薄ピンクのシャツを着て、ミニスカートを履いたその姿は、淫靡な雰囲気すら漂わせている。

「うふふ、お医者さんですよ？ これからみなさんを診察しちやいますよー？」

そして土道だが……

「つて、なんで俺は土織ちゃんの恰好なんだよお!!？」

そう、土道がさせられた恰好は女装であった。

可愛らしい水色のカーデイガンに、紺色のプリッツスカートである。しっかりとウィッグと髪留めもしてあり、完璧に女性にしか見えない姿であった。

「え、何その姿土織ちゃんつて言うの？ もしかして土道既に女装経験あり？」

「うっ!? そのことについては詳しく聞かないでくれ……」

「えー気になるー教えてよーねー土織ちゃんー」

「きゃあああああああああああああまさかこんなところで土織ちゃんに会えるとは思いませんでしたあああああああああ!!!」

耶俱矢さん！ 夕弦さん！ 感謝しますうううううううううううううう!!! しかも貴重な私服バージョン！ これはフレームに納めねばっ!!!」

女医姿の美九がものすごい勢いで土道もとい土織ちゃんの写真を撮る。

一方の土道は、もう慣れているのか諦めた様子で写真に撮られている。

「はははは——」

そんな様子を、笑いながら見る華恋。そんなときだった。

「うつ……?」

華恋は急なめまいを覚え、その場をぐらつく。

「っ?! 大丈夫かっ?!」

そんな華恋を、土道が急いで抱き止める。

同時に、華恋の頭にある記憶が駆け巡る。大切な人との、尊い一時の記憶が――

「……そうだ。私、前にもこうして服を選んで着せてもらった覚えがある。私の、大事な人に……」

「なんと?! 記憶が戻ったのか!?!」

「驚嘆。聞いてはいましたが、本当に効果があるところを見るとは」

「大丈夫ですか? 気分悪くありませんか?」

三人が驚き、心配した様子で見てる。

華恋を抱き止めている土道も、心配した表情をしていた。華恋は、そんな三人に対し、少しづらそうにしながらも、笑顔を見せる。

「うん、ちよつとグラついてるだけだから大丈夫。にしても、ありがとう。またみんなのおかげで、記憶が戻ったよ」

「……そうか。なら良かったんだが」

土道が相変わらず心配そうな声で言う。

彼を心配させたくない。ふとそう思った華恋は、土道の手から抜け、一人でしつかりと立って言う。

「うん、見ての通りピンピンしてるよ! どうも記憶が戻るときはちよつとクラクラしちゃうみたいだけど、今はもう元通りよ。心配かけてごめんね」

ニカッと笑って見せる華恋。そんな彼女に、ほっと胸を撫で下ろす一同。

「それよりもごめんね、なんか中断させるような事になっちゃって」

「何言ってるのよ! そもそも今回の対決も華恋の記憶取り戻すお手伝いみたいなもんだし、気にしなくていいって!」

「同感。華恋の記憶が戻ってなによりです」

「そうですよ! 私達はもうお友達なんですから、気にせずどんどん迷惑をかけてくれていいんですよ!」

「……友達、か。そっか」

美九達の言葉に、嬉しそうにはにかむ華恋。そんな彼女達の様子を見て、士道もまた微笑む。

「よし、それじゃあ続きといくか。こうなりやヤケだ！ どんどんコスプレするぞ！」

『おーっ！』

拳を突き上げる一同。

そうしてその日とはとにかく様々な衣装を着ていった。

結果、五人は閉店するまで店に居座ることになったのだった。

二六ドローイング

自分で自分自身を見つめる。

人生に迷ったときの比喩のようだが、ここではあいにくそうではない。

言葉通り、私が「私」自身を見ているのだ。

その時点で、ああこれは夢だ、と私は理解する。だって、自分を第三者の視点で見ると、夢かおぼけになったときでもない無理だろう。まあ、私の識別名はまさしく〈ゴースト〉なのだけだ。

ともかく、私は「私」を見つめていた。

私はどうやら犬小屋か何かを作っているようだった。それも一人ではない。モザイクに隠れた、誰かも分からない人物と一緒にだ。

「こんなの、私の力を使えば一瞬なのに」

夢の中の「私」が言う。そうだ、わざわざ自分の手で苦労しなくても、私なら簡単に――

「――」
すると「私」の横にいたモザイクの影が、何かを言った。でも私には聞き取れない。

「モノを作る楽しさ？ ……よくわからないけどまあ、君が言うなら……」

しかし「私」には聞き取れていたようで、返答する。

そのまま「私」はモザイクの影と一緒に、その犬小屋を完成させる。

「……なるほど。これはなかなか」

なんだか嬉しそうにしている「私」。ああ、そうだ。私はこのとき思ったんだ。

楽しいと。心地が良い、と。

それは、私にとっては未知の感情で。

そして、私にそんな感情をくれたのは、間違いなく――



「……ん」

華恋はベッドの上で眠たげな眼をゆっくりと開いた。窓の方を見ると、光が射し込んでおり晴れ晴れとした朝だということに分かる。

彼女はまだぼやけている頭をゆっくりと起こし、ベッドから体を出す。

「……随分とはつきりした夢を見たもんね」

そう言つてベッドから降りる彼女は下着姿だった。

黒のレースが淫靡な雰囲気を漂わせている。しかし、まだボケっとしている彼女の表情からは色気を感じられない。

華恋はその姿のまま洗面台に向かい、顔を洗った。

「ふう……さっきの夢は、私の過去、なのかな……？」

顔をタオルで拭きながら確証なさそうに言う華恋。

理屈的に考えればそうなのだろうが、いまいち華恋には実感がなかった。

それはやはり、他人の視線で自分を見たというのが大きかった。

「実感がいまいち薄いのよね……確かに、感情としてはまだこの胸に残っているというのに」

そう言いながらも華恋は服に着替える。

いつもどおり、黒のブラウスに白のロングスカートだ。

「ま、あやふやな記憶についてあれこれ考えても仕方ない……。さて、今日はたしか二亜さんと六喰ちゃんだったわね。準備しないと」

華恋はわざとらしく話を変えるように言った。

頭をとにかく切り替えたかったからだ。

胸にわだかまる、言葉にできない感情をごまかすために。

「おー！ よく来てくれたねえー！ ささっ、入って入って！」

それから少しして。

華恋はいつも通り土道と待ち合わせをし、彼に連れられて元精霊のいる場所へと案内された。

この日華恋が案内されたのは、元精霊達の住むマンションではなく、市内にあるタワーマンションであった。

どうやらそこが、今日一緒の時間を過ごす予定の二亜のマンションらしい。

そして、そのマンションに入り土道に連れられた部屋の扉を開けた瞬間に、二亜の過剰に明るい声が飛んできた、というわけだ。

「え、ええ……」

朝からテンションの高い二亜に若干気圧されながらも、二亜と土道は部屋に入る。

部屋は独特のインクの臭いが漂っており、華恋に不思議な印象を与えた。

だが、もつと驚く光景が彼女の目に入ってくる。

「二〇ページのベタ終わりました」

「では十一ページ目お願いします。こちらはトーンのカットをします」

「二二ページ、ゴムかけ終わりました」

同じ顔の少女達が、それぞれ漫画の作業をしているのだ。

華恋はその顔を知っていた。ヘフラクシナスの管理AIがボディを持った姿、マリアだ。

そのマリア達が、長机に向かって色々と手を動かしている。それはなかなか珍妙な光景であった。

「えっと……お忙しい様子で？」

華恋は状況がよくわからないながらも口を開く。

すると、二亜が迫ってきて言う。

「そうなんだよ！ いやーさすが！ よく分かってらっしやる！ だからね、今日は華恋ちゃんに、一緒に漫画作りを体験してもらおうかなーって」

「おい何が『だからね』だ！ ただ華恋に自分の仕事手伝わせようとしてるだけじゃねえか！」

土道が指差しながら叫ぶ。その言葉に、二亜は「てへ」と自分の頭を小突いて舌を出した。

「てへ、じゃねえよてへ、じゃ！　よくまだ会って日が浅い華恋にそんなこと頼もうってなるな!？」

「ははは、いいじゃん少年！。こういうのも経験のうちだし、もしかしたら過去に漫画描いてたかもしれないじゃん？」

「いやーその可能性は薄いかな……」

苦笑いしながら言う華恋。一方で、二亜は二人にバシツ！　と両手を合わせて頭を下げてきた。

「お願い！　正直尻に火がついてるの！　ね、これも風変わりなデートだと思つて、さー！」

「お前なあ……」

「……まあ、いいよ」

土道が呆れ返る中、華恋は少し困った顔をしながらも了承した。

「いいのか？　華恋」

「ああ、大丈夫だよ。さつき二亜さんも言ってたように、何事も経験だしね。それに……」

華恋は思う。この作業を手伝ったら胸にわだかまっている感情の正体が分かる、そんな気がする。

「それに？」

「ああいや、なんでもないよ」

聞き返してくる土道にごまかすように言う華恋。

こうして、二人は二亜の作業を手伝うことになった。

「ささ、こっちの席で！　少年はトーン貼り、かつちゃんはゴムかけお願いするよー！」

「かつちゃんて……私の事か……」

「はいはい」

突然つけられたあだ名に困惑する華恋に、呆れたように返事をする土道。

二人はそれぞれ二亜にそういった顔を見せながらも、席につく。

と、横を見るとまた見知った過去があった。六喰だ。

「おお、主様に華恋。おはようじや」

「おはよう六喰。今日は六喰も一緒なんだな」

「うむ。元々二亜と一緒に華恋殿とデートする予定だったのじゃが、何の因果がこんな形になってしまった」

「因果も何も二亜の怠慢だけだな！」

土道が言い、華恋はハハハと笑う。対して、六喰は落ち着いた様子で二人を見ていた。

「まあ、むくとしては別によいのじゃが……華恋は大丈夫かえ？」

「うん、大丈夫よ。さっきも言ったけど、こういうのも経験だから」

「ふんむ、ならよかった。さて六喰の作業はベタじゃ。こう筆でベタとするのじゃ。なので、ゴムかけが終わったら渡してくれ」

「うん、分かった」

「それが終わったら俺だな。任せてくれ」

六喰に頷く華恋と土道。

こうしてマリア達に更に華恋達が参加する形で、二亜の作業手伝いが始まった。

これから黙々と作業をするのかと、華恋は思った。

のだが……

「二亜、早く描いてください。作業が詰まっていますよ」

「そうですね、ただでさえ精霊である華恋に手伝ってもらっているのですから、それなりのやる気を見せてください」

「もう分かっているよー！ 相変わらず厳しいねーロボ子ちゃん達は！

もうちよつと優しくしてくれてもいいんじゃない？」

「そうやって厳しくさせているのは誰ですか。二亜はもっと責任感というものを持ってください」

二亜とマリアのやり取りがなかなか騒がしく、賑やかな現場になっっていたのだ。

「華恋、今のうちにちちゃんと報酬を要求したほうがいいですよ。タダ働きなどする事はありません」

「えっ、いいの？」

「ええどうぞ。二亜の代わりに私が許します。がつつりと要求してやってください」

「ちよつとー！ 雇用主に代わって何勝手に話を進めてるのさー！」

「では二亜は華恋にタダ働きをさせるつもりなのですか？　これはいけませんね、労基に連絡せねば」

「あははーそんなわけないじゃん！　ちゃんと報酬は支払うつもりだって！　だから労基は勘弁してくださいお願いします」

マリアに頭を下げる二亜。一方で、土道と六喰はそんなの日常風景と言わんがばかりに作業をしている。

だが、その光景を始めてみた華恋は、

「……ふふっ、あはははははっ！」

と思わず笑いだしてしまった。

「いやー漫画の作業つてもっと黙ってやるものだと思ってたけど、案外楽しいねー！」

「そうだな。少なくとも、二亜と一緒に作業していると飽きることはないよ」

「むん。仕事を溜め込むのはどうかと思うが、少なくとも手伝うのは嫌ではないしの」

土道と六喰が笑う華恋に言う。

華恋はそんな彼と彼女を交互に見る。二人共、話しながらも手は動いている。慣れているといった様子だ。

「二人共よくこうやって手伝っているんだね。なんとなく分かるよ」
「ははは……ま、時折SOSが来ることは確かだな。しかしまさかお前まで巻き込むとは思わなかったが……」

「元精霊達は皆一度は二亜の作業を手伝ったことがあるからのう。毎回大変そうにしているから、皆技術をどんどんと蓄えていつておるぞ」

「へえー」

感心しながらも消しゴムかけを終えた華恋は、六喰に原稿を渡す。すると、彼女はまたささつとベタを塗っていく。

なるほど技術があるというのは確かなようだ、と華恋は思った。

「主様、できたのじゃ」

「おう、ありがとな六喰」

その原稿を土道が受け取る。そして原稿に土道がトーンを切って

貼っていく。

一連の流れ作業。それをこなし、華恋はふと思った。

「……いいもんだね、こういうの」

「え？」

土道が聞き直す。華恋は、そんな彼に柔らかな笑みで答える。

「いや、こうやってみんなで協力して、一つのことを成し遂げる。それは、とてもいいものだって」

「……そうだな。俺もそう思うよ」

華恋の言葉に頷く土道。そんな彼に、柔らかな笑みを浮かべる華恋。そんな二人を見ながら、六喰が口を開く。

「むん、その気持ちは六喰も分かるのじゃ。大切な家族である主様達と一緒に過ごしながら、みんなで様々な事を経験する。これは、とてもかけがえのない時間じゃと、むくは思うのじゃ」

「六喰ちゃん……なるほど、良い事言うね」

華恋はそう言いながら六喰の頭を優しく撫でる。

そして、彼女の頭を撫でながら華恋は気づいた。朝からずっと胸に抱いていた感情が、今自分が抱えている感情と一緒にということ。

つまり、誰かかけがえのない人と共に同じことをする。それが、とても尊い時間で、心安らぐということ。

「……そっか。そういうことか」

「どうしたんだ、華恋？」

「いや、なんでもないよ。ただ、胸のつつかえが一つまた取れたってだけの話さ」

華恋の何かを悟ったかのような様子に、土道は頭に疑問符を浮かべる。

が、悪いことではないとすぐさま理解したのか、土道はそれ以上は何も言っていなかった。

「さ、じゃあ頑張ろうか。二亜さんの原稿落としたら可哀想だしね」

「ははっ、まあそうだな」

「うむ。むく達がいる限りそんなことはないのじゃ」

そうして作業をより捗らせていく面々。途中で合間合間に休憩を

取ったり、何度も二亜とマリアの楽しい口論を聞いたりしながら、一枚また一枚と終わらせていく。

そうした作業が進み、いつの間にか夜の六時を過ぎた頃だった。

「終わったー！」

二亜の開放感にあふれる声が響く。ついに作業が終了したのだ。

「ふうー、疲れたー」

「そうだなあ。すっかり肩が凝っちまったよ」

「むん……さすがのむくも目がしばしばするのじゃ……」

「いやーみんなお疲れ！ 今日ありがとねー！ これで今回も原稿を落とさずに済んだよー！」

あっけらかんに笑いながら言う二亜。

そんな彼女に、華恋達は苦笑する。

「じゃ、さっそくお礼に近くのレストランで晩ごはん奢るよ！ じゃんじゃん好きなもの頼んじゃっていいよー！」

「二亜、それではいささか報酬とは言いづらいのではないですか？」

「そうですね二亜、もつとちゃんとした報酬を支払うべきです」

「そして私達も給与の支払いを要求します」

「うっ、分かったよ……じゃあとりあえずロボ子ちゃんのところには口座に振り込んでおくから！ 少年達のも後でまたちゃんと渡すから！ とりあえず今はごはんー！ お腹空いたー！」

駄々っ子のように言う二亜に、一同は彼女に半眼を向ける。

ともかく、晩ごはんを二亜のおごりでみんなで取ることはなったので、二亜、土道、六喰、華恋の四人でマンションを出た。

そのとき、空を見上げると既に夕日が沈み始め、少しずつ星空が見えてきていた。

「おお……なんだか、なかなか情緒があるね」

「そうじゃのう……なあ華恋よ」

「ん？ なんだい六喰ちゃん」

六喰に呼びかけられ横にいる彼女の方を向く華恋。すると、目を合わせながら六喰は言った。

「食事を終えた後、主様やむくと一緒に星を見ぬか？ むくが、星の事

を色々教えてやるのじゃ」

「へえ、星、詳しいんだ」

「うむ。まあそこそここの」

少し得意げな六喰。そんな彼女がなんだかとても愛おしくなり、華恋は満面の笑みで答える。

「うん、いいよ！ 一緒に星、眺めよう！ 私に星の見方、教えてよね」

「うむ。任せるのじゃ」

「ははっ、またこの後の楽しみが増えたな」

「えーそこには当然私もいるよねー？ 後でお酒買わないと……」

「星見るつつつてるだろうが！ 酔っ払ってどうするんだよ！」

「えー！ いいじゃん星見酒ー！」

そんなことを話しながら、四人は日が沈む街中を歩いていった。そして、華恋はまたひっそりと過去の感情を取り戻したのだった。

三五スイーツ

「……まさか、こんな形で土道の家に来ることになるとはね」

華恋は、五河家を前にしみじみとそう言った。

そう。今回のデートは他でもない、土道の家で行われるのだ。

華恋は、隣に土道がいながらもなんだか体をソワソワさせることを抑えることができなかった。

「んー……なんかちよつと緊張」

「おっ華恋でも緊張なんてすることあるんだな」

冗談交じりに土道が言う。

対して華恋も、冗談っぽく口を尖らせてみる。

「む、それは失礼だよ土道。私だつて緊張ぐらいする。大学の講義でのグループワーク発表とかだつて実は緊張したりしてるんだよ?」

「そうだったのか、結構涼しい顔でやってるように見えたもんだからてつきりしてないのかと思つたよ」

「女は感情を隠すのがうまいもんなのさ。プレイボーイなのにそんなことも知らないのかい?」

「だからプレイボーイじゃないって」

「お返しだよ、ふふ」

そう言つて土道に微笑む華恋。土道は、そんな彼女の笑みに一瞬ドキリとする。

が、華恋はそんな土道の機微を察することはなかった。

「ま、まあこんな玄関前で立ち話つてのも変な話だ。中入ろうぜ」
「うん、お邪魔させてもらうね」

華恋はそうして土道に続いて五河家へと上がった。すると、玄関から入つてすぐ、二人を迎える姿があつた。

狂三と琴里だ。

「あらあら、お二人揃つて仲良く話し込んでいましたようで、妬けてしまえますわ」

「そんなんじゃないって……ただの世間話だよ」

からかうような狂三の言葉に、土道が少し困つたように返す。そん

な土道を見て、狂三はくすくすと笑っている。

「ふうん？　ま、それならそれでいいけど。ようこそ我が家へ、華恋。歓迎するわ」

「ありがとう、琴里ちゃん」

土道に対し少し厳し目な態度を撮りながらも華恋を歓迎する琴里に、華恋は笑顔を見せる。

狂三と琴里。なんだか不思議な組み合わせだと、華恋はなんとなく思った。

第一印象として、あまり馬の合うタイプには思えなかったからだ。

「それで、今日は君達兄妹の家で何をするのかな？」

華恋はそんな内心を密かにしつつも、琴里に聞く。今回も何をするのかは聞かされていなかった。

「そのことだけれど。実は、今日はみんなでお菓子作りをしようと思うのよ」

「お菓子作り？」

「ええ、そうですわ」

聞き返した華恋に返したのは狂三だ。

狂三はおしとやかに両手をお腹のあたりで合わせながら言う。

「実はここにいる琴里さん、あまり料理が得意ではありませんの。それで、しばしばわたくしや土道さんが教えているのですけれど、せっかくですしそれに華恋さんも参加してもらおう、という考えですわ」「へえなるほど。それは確かにちよつと面白そうだね」

「……ところで華恋は、どれくらい料理できるの？」

琴里が恐る恐ると言った様子で聞いてくる。どうやら、華恋の腕前が気になって仕方ないらしかった。

「私？　ああ、全然だよ。朝は買い置きパン、昼食は学食、夕食は弁当なんて自堕落な不健康学生生活を送ってるし。自前で作るうっつなるときもあるけど、大抵面倒になって結局出来合いのものを買うことが多いくらいだから」

「そ、そう……なるほどありがとう、参考になったわ」

なんだか少しほつとしているような琴里。

そんな彼女を見て、華恋はちよつといたずら心が芽生えてしまう。「あ、でも最近是比较的自分で作ることが多いかなー。別にできないわけじゃないしー」

「え!?! そ、そうなの!?!」

一点少し焦る様子を見せる琴里。

そんな彼女が、なんだか可愛くて仕方なくなる華恋であった。

「おいおい、あんまりうちの妹をからかわないでくれ」

そこで、土道が割って入ってきた。それで、からかうのはここまでだと華恋も察する。

「はいはい、ごめんね琴里ちゃん。料理が下手で教わる側なのは一緒だから安心して」

「べ、別にそんなことは考えてなかったわよ! ただ気になっただけ! ほら、早く台所に行くわよ!」

顔を赤面させながらも台所へと急かす琴里。そんな彼女を見ながら微笑む土道と狂三。

そんな彼らにつられるように、華恋もまた微笑する。楽しいお菓子作りになりそうだと、華恋は思った。

そうして台所に移動し、手洗いなどの準備を済ませた面々。

エプロン姿になった彼女らの前には、お菓子作りに必要な道具や材料が置いてある。

「さて、ではこれからケーキを作りたいと思いますわ」

「なるほどケーキを」

「ああ、今日は簡単にデコレーションケーキを作るぞ」

「で、デコレーション……それ本当に簡単なの……?」

進行を始める狂三と土道に華恋と琴里が反応する。

琴里は若干緊張した面持ちだ。

「まずは生地を作りますわ。このボウルに卵とグラニュー糖を入れて、湯煎にかけて溶けるまで泡立ってますわ。さっそくやってくれるかしら琴里さん?」

「え、ええ。任せて頂戴。湯煎は前チョコレートを作ったときにしつ

かり学んだものね」

そう言つて琴里は言われた通り卵とグラニュー糖を湯煎しながら泡立てる。

「ぎこちない手付きだったが、問題は発生せずにしつかりとかき混ぜることができていた。」

「では次は薄力粉を振るい入れて混ぜる、だな。それである程度混ぜてバターとバニラエッセンスを入れるんだ。これは華恋がやつてくれるか？」

「よし、任せられた」

華恋は琴里からボウルを受け取ると、こちらも言われた通りにする。

しかし、琴里と違ってその手付きは慣れたものだった。とてもスムーズに、篩で薄力粉を落とし、ゴムべらでしつかりと混ぜたのである。

「おお、華恋慣れてるな。もしかしてケーキ作りは初めてじゃないのか？」

「……そうなのかな？ いや、もしかしたらそうかもしれないね」

そこで、華恋はうつすらと自分のしている行為に既視感を覚えた。

自分は、以前もこうしてケーキを作ったことがあるという既視感を。だが、彼女が大学生に身をやつしてから、ケーキなど作ったことがない。

「……ということは……」

「もしかしたら、私は失った過去で、こうしてケーキを作ったことがある、んだと思う」

「あらあら、さっそく記憶を取り戻しましたの？ 案外早いすわね」

「いや、取り戻したっていうのはつきりしたレベルじゃないんだけど、既視感はしつかりと覚えてるんだ。だから、やったことあるのかなつて」

「なるほどね……じゃあ、このままお菓子作りをしていけば更に蘇るかもしれないってことね」

「そうなるかもね、多分だけど……」

狂三と琴里の言葉に少し自信なさげに笑いながら答える華恋。

実際、確証は何もなかった。本当にぼんやりした感覚だったからだ。

だが記憶を取り戻せる僅かな可能性の一つなのだ。その上から垂らされる希望という糸を、できるだけつかみ取りたいという気持ちがあつたのだ。

「ま、そう堅苦しくならずにつづいていこうぜ。お菓子作りは、楽しまなきや損だ」

華恋が少しナーバスになっていたところで、土道が言う。

彼の軽い感じでありながらも気を使ってくれているのが分かる言葉は、華恋の心の重荷を軽くしてくれるような感じがした。

「うん、そうだね。今は美味しいお菓子を作ることだけを考えよう」

なので、華恋も笑って土道に返す。今はただみんなでこの時間を楽しむ。それだけを考えようと思った。

「そうですね。それでは、次の工程に行きたいと思えますわ。次は華恋さんの作った生地をこの既に用意した型に流し入れますわ。その後、上から軽く落として空気を抜くのも忘れずに。そのあとこれまた予熱をしてあるオーブンで焼きますわ。じゃあこれを琴里さん、お願いしますわ」

「よ、よし。やったらもうじやないの……!」

そうして琴里は緊張しながらも工程に入る。その後も、お菓子作りは順調に進んでいった。

大きなトラブルもなく、狂三と土道の手ほどのきの下で琴里と華恋がケーキを作っていく。

そうして、ついに――

「お、おぉ……! ……できたっ……!」

琴里が感極まったように言う。

彼女の目の前には、たっぷりクリームといちごが乗った大きなデコレーションケーキが出来上がっていた。

「やったね琴里ちゃん! 綺麗にできたよ! 私もちよつと感動しちゃった!」

「え、ええ！ やったわ……！ 何よ、案外できちやうんじゃないの……！」

華恋と琴里はお互いそう言いながら両手を合わせぴよんぴよんと飛ぶ。

二人のその微笑ましい光景に、狂三と土道が笑みを見せる。

「……っ！ ま、まあこれぐらいできて当然だし！」

と、その視線を感じたのか、琴里は急に飛ぶのをやめ、つんとした顔で言う。

「えーもつと一緒に喜ぼうよー琴里ちゃん！」

華恋はそんな彼女にベタベタとまとわりつきながら言う。

「ちよ、やめてよね!? 恥ずかしいじゃないの!?!」

「ははは、すっかり仲良くなつたな二人共」

わいわい騒ぐ二人を見て土道が言う。その横で、狂三がコクリと頷く。

「ええ、ええ。あの琴里さんがこんなにかわいらしいなんて、愛おしいですわ。食べてしまいたいほどですわ」

そう言いながらペろりと唇を舐める狂三。どこか艶やかな雰囲気漂わせる仕草だった。

「来たぞシンドー！」

と、そのときだった。元気な声がりびングから響いてきたのだ。十香だ。

「ん？ おお華恋！ そうか、今日は狂三と琴里と土道との四人でのデートだったのだな！」

「そうだね。十香は遊びに来たの？」

「うむ、そんなところだ。他の面々もいるぞ」

十香がそう言った直後、ぞろぞろとリビングに他の面子が入ってくる。折紙、二亜、四糸乃、六喰、七罪、耶俱矢、夕弦、美九、そしてマリアである。

「おおっ、一気に来たなあ」

「うむ、示し合わせたわけではないのだが、途中で会つたのでな。ところで四人は何をしているのだ？ 何かいい香りがするのだが……」

「ああ、今丁度ケーキを作っていたんだよ。十香達も食べる？」

「ケーキだど!? それは魅力的だが、食べていいのか!?」

「大丈夫よ。ちよつと大きいケーキだし、まだまだ作る材料はあるからね」

「そうですわね。せっかくだしみなさんと食べられるようにもう一つ作りましょうか」

目を輝かせる十香に琴里と狂三が言う。すると、話を聞いていたのか他の元精霊達も集まってきた。

「ケーキ、ですか? 楽しみです……!」

「うふふー? こんな美少女に囲まれながらケーキを食べるなんて、甘すぎて病気になっちゃいそうですー!」

「ケーキかー、ならシャンパンが欲しいところだねえ」

「二亜はただお酒飲みたいだけでしょ……」

「そうですね。むしろ二亜だけは一人水を飲んでもらいましょう。普段お酒ばかり飲んでるので休肝日です」

「なんでよりによつて今からあ!?!」

一気に賑やかになる五河家。その光景に、土道が凄く楽しそうな笑みを浮かべているのを、華恋は見た。

そして、そんな彼を見て、なんだか華恋も楽しくなってきたのである。

「よし、じゃあじゃんじゃん作ろうよ! 今日パーティーな気持ちでさー!」

「おつ、いいな! 任せとけ!」

華恋の言葉に答える土道。彼女も彼も、勢い任せとは言え気持ちのいい笑顔でやり取りした。

「パーティーですかー! いいですねー! あ、そうだ。せっかくだし写真も撮りましょう! みんなで代わる代わる、今日という日をフレームに収めるんですー!」

「お、美九。面白い提案するじゃないか。でもカメラはどうする? スマホのカメラで撮るのか?」

「大丈夫。常に一眼レフカメラを所持している」

「……さすが折紙」

美九の提案を採用した土道に素早くカメラを渡す折紙。

その姿に、華恋は思わず笑ってしまった。

そうして一同はその日、図らずともちよつとしたパーティをするこ
とになった。そしてその中で、沢山の写真がカメラに収められた。

みんなが代わる代わる撮った写真。それは、常に笑顔が満ちるいい
写真であった。

十一 サイトシーング

「……ふふ」

華恋は夜の自室で、写真片手に微笑んでいた。彼女が手にしている写真は土道の家において流れで開かれたパーティのときに撮られた写真だ。

撮影したのはマリアで、華恋と土道、そして元精霊達が全員一枚の写真に収まっている。

撮られた写真を、すぐさまへラタトスクが現像して、みんなに配ってくれたのだ。

華恋ももちろん貰い、今こうして眺めている。

「なんというか、結構楽しかったな……」

華恋は一人そう言う。

ここ数日のデートは、色々と風変わりではあったけれど、彼女に記憶を取り戻させ、楽しい時間を過ごさせてきた。

それは、確実に彼女の心に響いていた。

「これであとは私の好きな彼の記憶が戻れば万々歳なんだけどね……」

断片的な記憶は取り戻しても、肝心の想い人の記憶は取り戻せていない。

それを取り戻せば大きく前に進める。少なくとも華恋はそう思っていた。

「みんなとのデートで戻っているし、また明日のデートで何かが変わるよね」

そう、翌日にも華恋はデートを控えていた。

相手は、十香と折紙だった。

彼女らは元々大学の友人であるためデートと言うよりはただの外出になりそうな気がしないでもなかったが。

「とにかく、明日だね。となると、今日はさっさと寝るかしら」

そうと決めると、華恋は写真をスケジュール帳に収めて、すぐさま歯を磨いて、服を脱ぎ下着姿でベッドに入るのだった。

「やつほー！ おはようみんな！」
そして翌日。

華恋は天宮駅前の噴水の前で待っていた十香と折紙、そして土道の元へと手を振りながらやってきた。

時間は朝の十一時。約束の時間きっかりだった。

「おおー 華恋ー！ おはようなのだ！」

「おはよう」

「おう、おはよう」

十香達がそれぞれ華恋に挨拶を返す。

「いやーこの前は楽しかったね。今日もよろしく！」

「うむ、任せておけ！ この私がしつかりとでえとの手引きをするぞ！」

「正確には私達。今回のデートプランは二人で考えた」

「む、そうだったな。すまぬ折紙」

「いやいい。気にしていない」

親しげに語る十香と折紙。

それを土道が楽しげに眺めている。

華恋はそんな三人を見て、ふふつと笑う。

「やっぱ仲良いね君達。初めて会った頃から思ってたけど、こうして遊びに行くってなると尚更思うよ」

「ん？ 何を言っているのだ、私達だけではなく華恋もだろうか？」

「え？ 私も仲間でいいのかい？」

華恋は思わず聞き返す。

確かに十香達は友人だ。だが、彼女達の仲は特別で自分はまだまだ及ばないと思っていたのだ。

しかし、十香は不思議そうに言う。

「ああ、そうだ。華恋も私達の大事な友人で仲間だぞ！」

「それは、私が精霊だから？」

「いや、十香の言葉にそんな意味はない。華恋が精霊であろうとなかろうと、もう私達にとっては友人」

「そうだぞ華恋。まだ出会って数ヶ月だけど、俺はしつかりお前のこととをいい友人だと思ってる。それとも、お前は違うのか？」

「いや、そんなことはないよ。むしろ、そう言ってもらえて嬉しいっていうか……」

華恋は少し赤面し、俯きながら言う。

内心では思っていた頃だが、面と向かって言うのはなかなか恥ずかしかつたのだ。

「は、はは……ま、まあ！　つまり今回のデートは楽しみにしてるってことだよ！　今日は頼んだよ、十香！　折紙！」

「うむ！」

「任せて」

勢いでとりあえずごまかした華恋。

そんな彼女の内面を知ってか知らずか、二人は華恋に気持ちよく答える。

「俺も今回のデートプランについては知らないんだよな。だから楽しみだよ」

「おお！　シドーにも存分に楽しんでもらうぞ！　ではさっそくだが

……最初は昼餉を取ろぞ！　腹が減っては戦はできぬからな！」

十香はそう言っただけで面々を先導する。その足取りは軽く、今日これからへの期待が現れているようだった。

そんな彼女を見てみると、自然と華恋も楽しくなってきた。その証拠に、華恋の足取りも軽快だ。

「……」

そして駅から少し歩いて、華恋達とはあるレストランへと案内される。

「……」

土道が言う。

彼の言う通り、そこは最近オープンしたばかりのレストランだった。オープンしたてどうのもあって、人が多く出入りしている。

「うむ！　新しくできると言うことでこの前一人で訪れたのだが、なかなか美味でな！　ぜひ土道達と一緒にここで昼餉を取りたいと

思っていたのだ！」

「なるほどね……十香のイチオシなら期待できそうだな」

「そうだね。十香がグルメなのは私も知ってるし、楽しみだよ」

期待に胸を膨らませながら店内に入る華恋達。

店内にも多くの客がおり、面々は席が空くまで少し待たされる。それで二十分ほど待つて、店内に促される。

「さて、メニューには色々あるけど、十香としてはどれがオススメだい？」

席についてメニューを開いた華恋が聞く。

すると、十香は待つてましたと言わんがばかりに口を開く。

「おおー。そうだな、この店はハンバーグが専門店顔負けの美味しさなのだ！ 照り焼きハンバーグに炭火焼きハンバーグ、俵型ハンバーグ……どれも美味だぞ！」

「へえー、じゃあ私はこの炭火焼きハンバーグ頼むかな」

「じゃあ俺もハンバーグで。せっかくだしみんなでハンバーグ頼んでそれぞれの違いを楽しまないか？」

「おおっ！ それはいいな！」

「士道が言うなら」

そうして華恋が炭火焼きハンバーグ、士道がチーズハンバーグ、十香が照り焼きハンバーグ、折紙がきのこ添えハンバーグを頼む。

四人は待つ間も大学での話をして少し時間を潰して、ハンバーグが来るのを待つ。

すると、すぐさま四人分のハンバーグがやって来る。その光景に、十香はキラキラと目を輝かせていた。

「見ろシドー！ いろんなハンバーグが一気にやって来たぞ！ これは美味しそうだ……！」

「そうだな。よしじゃあみんなで食べようぜ」

「うむー」

「だね」

「うん」

全員が頷き、それぞれのハンバーグを食べ始める。

「んー！ 美味だ！」

すると、いの一番に十香が幸せそうな顔をして言った。

「おおつ、本当にかなりイケるなこのハンバーグ！ レシピを教えてもらいたいぜ……！」

「ははっ、レシピって土道主婦くさーい。でも、確かに凄い美味しいね」

「同意する。さすが十香、料理の事に関しては信頼できる」

十香に続いて感想を述べる各々。

もちろん、その後それぞれのハンバーグをそれぞれに渡し、味の違いも楽しむ。

「うーん！ きのこが肉汁と絶妙なハーモニーを奏でているぞー！」

「あー照り焼きってくどいイメージがあっただけど、結構食べやすいねこれ。ガンガンいけそう」

「炭火焼きなだけあっていい火の通り具合だ……うちでも炭火焼きやってみたいなあ」

「このチーズ、土道の味がする。美味しい……」

「一人だけ感想の方向がおかしくありませんか折紙さん!？」

四人はわいわいと話しながら食べ、あっという間に完食してしまふ。その後も、十香が追加でおかわりを頼むなどしたが、とりあえずはそれで昼食を終え、レストランから出た。

「いやー美味しかった！ 今度もまた来たいねここ」

店から出た華恋が言う。すると、十香はとても嬉しそうな顔をする。

「ふふっ、華恋やシドーに教えることができてよかったぞー！」

「ああ、ありがとうな十香。それで次はどうするんだ？」

「次は私。こっちに来て」

折紙はそう言つて三人の先頭に立つて歩き始める。三人はそれに談笑しながらついていった。

のだが……

「……なあ折紙、なんかどんどん裏路地に入つて行つてないか？」

「大丈夫。私を信じてついてきて」

「お、おう……」

「む？ こんなルートだったか？ 前の相談ではもっと……」

「え、何それ。私ちよつと怖くなって来たんだけど」

暗く狭い道をガンガンと進んでいく折紙に不安を隠しきれない華恋達。

だが、折紙はそんな彼女らのことを気にすることなく進んでいく。

「……」

ついに折紙がとあるところで足を止め言う。そこは、とても妖しいビンなどが並んでいる、異様な雰囲気醸し出す店だった。

「ええと、折紙さん……？ 一応聞くけど、この店は一体……」

「最近見つけた薬剤店。表にある店では扱ってないような素材や薬が扱われている。オススメ」

「オススメじゃねえよ!? なんつうところを華恋に案内してるんだよ!?」

土道の鋭い声が飛ぶ。更に、驚いているのは土道だけではなかった。

「待て折紙?! 前日の打ち合わせと違うぞ！ 隠れ家的な洋服店に行

くのではなかったのか!？」

「隠れ家的シヨップなのは変わらない。情報が少し間違っただけ」

「意図してるのを間違えとは言わねえ!」

「こ、これはなかなか……折紙的にはどういう狙いでこの店を……?」

さすがに困惑する華恋。すると、折紙は冷静な表情を崩さずに言う。

「華恋にも好きな相手がいると言っていた。ならば、この手の店の事は知っておくべき。いつだって相手をやる気にさせるのは女の務め」

「ああやる気ってそういう……」

「ろくでもないことを華恋に教え込もうとするんじゃない!」

「いやしかし、案外必要な事なのかも……」

「華恋!？」

結局、その妖しい店はさつさとすませて次に行くこととなった。

華恋的にはわりかし見てみたいという気持ちもあったが踏み込んだら戻ってこられなさそうな気もしたのでとりあえずヨシとした。

そんなこんなで裏路地を出ると、再び十香が先を歩くことに。そうして彼女が華恋達を連れて行った先は、ゲームセンターだった。

「お、ゲーセンか。確かにみんなで遊ぶのにはいいかもな」

「だろう？ それに、ここではシドーに色々と教えてもらったからな。今度は私が教えたいのだ」

「へえ、ゲーセンデートとかしてたんだ。土道もやるう」

「ま、まあな……」

「それで、最初は どうする？」

「そうだな。最初は……やはりアレだろう」

折紙の言葉を受けて十香が指差したのは、UFOキャッチャーだった。

ケースの中には可愛らしい人形やキーホルダーなどのアクセサリーがいくつも景品として並んでいる。

「UFOキャッチャーかー。言われてみればじっくり遊んだことはないかもなあ」

「そうなのか？ ならばすぐさまやるぞ！ 私がお手本を見せてやるう！」

十香はそう言い華恋の腕を引っ張る。

「お、おお!?! 十香!?!」

華恋はそれに戸惑いながらも彼女についていく。

彼女らのそんな後ろ姿を見て、土道と折紙は軽く微笑みついていく。

「はっ！ そりゃっ！ ……えい！ どうだ！」

並ぶUFOキャッチャーの一つに立つと、十香はさつそく中の景品を取るために格闘する。何度か失敗するも諦めず、小銭を投入する。

そして、四回目のチャレンジで、十香は景品を見事手に入れた。可愛らしい犬のキャラクターがついたピンク色のストラップだ。

「どうだ！ 華恋！」

「おおつ、凄いじゃん十香！ たった四回で目当ての景品を手に入れるなんて、なかなかできることじゃないよ」

「ふふふ、いつもは士道に取ってもらっていたからな。私も自力で士道にプレゼントできるような特訓したのだ」

「へえ……まったく、幸せものだね士道は」

「ああ、まったく」

ニヤニヤしながら言う華恋だったが、士道は恥ずかしげもなく答える。それがちよつと意外で、華恋は軽く驚く。

「おお、随分素直に認めたね」

「幸せなのを否定する気はないからな。みんなが楽しく過ごせる。こんな幸せな事はないさ」

「ふうん。なるほどね……」

華恋は士道の言葉に柔和に笑う。彼がどれだけ精霊達の事を気にかけているか、今の言葉で伝わってくる、そんな気がしたからだ。

「よしじゃあ、私も頑張ってみるかな。せっかくだし、十香と同じものを狙ってみよう」

華恋はそうして十香が立っていた台の前に立ち、景品を狙い始める。

が、なかなかうまくいかずどんどんと小銭を消費していく。

「うう……なかなか難しいね……」

「華恋、ここは大きく中央を掴むのではなく、端っこを狙ってみるといいぞ」

「そうなの十香？ じゃあ……おつ、本当だ！ 掴んだ！」

十香のアドバイスにより、華恋はストラップを手に入れる。十香と同じ種類だが赤色の色違いのストラップだ。

「やった！ やったよ十香！」

「うむ！ よくやったぞ華恋！」

二人で両手を合わせ喜び合う華恋と十香。それを見ていた士道と折紙が、二人に近づく。

「ははっ、楽しそうだな。じゃあ、せっかくだし俺も狙ってみるか」

「士道が狙うなら私も」

「おつ、みんなで同じストラップを？ いいね、デートっぽい！」

その後、土道がすんなりと、折紙が少し苦戦してストラップを入手する。それぞれ青色と白色の色違いだ。

更にその後もゲームセンターで一同は遊んだ。格闘ゲームでしのごぎを削り合ったり、レースゲームで競い合ったり。

そうしてゲームセンターで遊んでいた時間は、なかなか長かった。

四人が満足して外に出ると、午後四時半を過ぎていた。

「む、予定より長く遊んでしまったな……すまぬ折紙。この後服屋にいく予定であったのに、時間を消費してしまった」

「大丈夫、気にしていない。むしろ、私の予定は飛ばして最後の場所に行ってくれてかまわない」

「いいのか？ しかしそれでは……」

「問題ない。洋服店で水着に着替えて土道をドッキリさせる計画はまた今度にする」

「なんで俺を狙った計画が企てられているんだよ!？」

「ははは、折紙らしい。それで、最後はどこへ行くんだい？」

「うむ、折紙がいいなら……こっちだ」

十香と折紙についていく土道と華恋。

そうして四人がたどり着いたのは、天宮市を一望できる高台だった。

「なるほど、ここか……」

土道が感慨深く言う。彼にとってそこは、馴染み深い場所であったからだ。

「おお、高台なんてなかなか来たことなかったけど、これは壮観だね……」

夕日に照らされる天宮市を眺めながら、華恋が言う。その横で、十香が落ち着いた笑みを浮かべながら口を開く。

「ここはな、私が最初のでえとでシドーに連れてきてもらった場所なのだ」

「そうなの？」

「ああ、そうだな」

土道が頷く。その横で、折紙も色々と思いに耽った顔で街を眺めている。

「ここは他にも色々な思い出が詰まった場所だな……ぜひ、華恋にもこの景色を見てもらいたかったのだ」

「へえ……」

華恋は言われた通り、景色を眺める。

街は、真つ赤に燃える夕日に照らされ、紅に染まっていた。その景色は、とても美しかった。

「ああ、とても綺麗だよ。ありがとう、十香、折紙、土道。この数日で、私はたくさんのものを君達にもらった。そんな気がするよ」

「なーに気にすんな。お前はもう俺達の大切な仲間の一人なんだ。なんなら、これからいっぱい楽しい経験しようぜ」

土道が言う。彼の言葉に、華恋は少し感動を覚える。

「……そうだね。まったく、精霊達が君に惚れているのが、よく分かったちゃうよ。ま、私は好きな相手がいるから、土道には靡かないけどね」

「ははっ、こりや難敵だな」

笑って言う華恋に笑って返す土道。和やかな空気が、四人を包んでいた。

華恋は、穏やかな笑みを浮かべながら街に目を戻す。

「しかし、本当に綺麗だ。でも、見方によっては街が赤く染まってるってのは、ちよつとホラーかもね」

「言い方の問題だろ、それ」

「ははははっ、まあね。でも、今日の夕日は一段と眩しいからさ。街が真つ赤に……真つ赤、に……」

そのときだった。

華恋の視界に、急に砂嵐のようなノイズが走った。

「あれ……?」

違和感を覚える華恋。まるで大切な何かが表出しようとしてしかし出てこないそんな不快感を伴った違和感を。

「痛っ……!」

そんなとき、華恋は高台の木製の手すりのささくれだった部分に触れてしまう。そして、指から血を流す。

華恋はその血を見る。すると、どんどんと頭の中の違和感が大きくなっっていく——

「赤い街……血……炎……」

「華恋……？ どうした？」

土道が彼女の様子を不審に思っただけでなく、他の二人も、急に華恋の様子が変わったのを不思議がっている。

一方で、彼女は——

「街が……紅あかく……染まる……ああ、違う……これとは違う……でも知ってる……あの街を……私は……彼は……」

華恋の頭に次々と、映像が流れる。

血と炎に染まった街。

迫りくる黒い影。

響く悲鳴。

横たわる死。

そして——

「あ、ああ……彼は……彼が……彼が、死んじやった……夕日と炎と血の中で……やだ……死なないで……私を、一人にしないで！」

その叫びの瞬間、華恋の体から強烈な衝撃波が飛んできた。

「うわっ!？」

「きゃあっ!？」

「ぐっ……!？」

大きく吹き飛ばされた土道達。

だが、それだけでは終わらなかった。

「あ……ああ……!？」

華恋が頭を抑えながらその場にうずくまっただけでなく、高台の手すりの向こうの空が急に『割れ』始めたのだ。

土道はその光景に見覚えがあった。そう、それは初めて華恋が精霊として目覚めたあのときの——

「私の……私のせい……嫌……嫌ああああああああああああ

あああつっ！」

大声で叫ぶ華恋。それと共に彼女は霊装となる。白と黒の着物、そして彼岸花のかんざしの霊装に。

そして、同時に空のひび割れがピシッ、ピシッと音を立てながらどんどんと大きくなっていく。

「あああああああああああああああああああああああああああああああああつっ!!!」

天まで響きそうな咆哮。それを鎬矢とするように、ついに空が、割れた。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

そして現れる、不定形の狼達。

何十匹もの化け物が、空から現れ華恋を取り囲んだ。

「華恋っ！」

倒れながらも叫ぶ土道。

「あああああああああああああああああああああああああああああつっ！」

が、次の瞬間、華恋が叫ぶのと同時にその化け物達は一齐に首を吹き飛ばされる。

見えない死神の鎌に刈り取られたかのように。

そして、ゆつくりと立ち上がる華恋。彼女は、重そうな頭を持ち上げ、土道を見る。

彼女は、泣いていた。これまで土道が見たこともない、絶望に満ちた顔で泣いていた。

「土道……彼、死んじゃってた……私の、私のせいで……」

そうして彼女は言う。

涙を流しながら。今にも果ててしまいそうな苦しげな声で。

「私が……殺した……」

私が生まれて壊した世界

私の誕生は、静寂を伴っていた。

目が覚めたとき、辺り一帯は荒野だった。

その荒野は私が作ったことを、私はなんとなく理解していた。

そして、私が創り出された命であるということも、同時に私は知っていた。

私は精霊。世界中のマナを凝縮し造られた、人造の超常。私の存在を望む者が、世の理を捻じ曲げ私を作ったのだと。

だが私は、その意思に従う気はなかった。私は生まれた直後から私であり、他の誰にも侵される気はなかったからだ。

故に私は、私を利用しようと近づいてきた者を排除し、一人隣界へと姿を消した。

それが私の生の始まりであった。まるで追いかけてきたような私の生の。

隣界に潜む私を無理やり現実世界へ引き込もうとする者が数多いた。だが、私はそのすべてを排除してきた。

しかし私を求むものは後を絶えない。隠れは引き戻されの連続。私はほとほと嫌気が差していた。

そんなときだった。私が、彼と出会ったのは。

彼は私がいつものように現実世界に引きずり出されたときに、近くにいた。彼は私を呼び出した者達——所謂純正魔術師（メイガス）の一味の一人だった。

だが、彼は彼の仲間を裏切り、私一人を連れ急にその場から逃げ出したのだ。

私は驚いた。人間とは集団で群れ、寄り添い合わねば生きていけない弱い存在であると私は思っていたから。そんな弱い存在が、急に集団から離脱するような行為をしたのが、そして更に、たまたが人間如きが私に触れ、拐えた事が意外で仕方なかったのだ。

「人間、なぜ私を連れ出したの。君も私の力が望み？」

私は彼に問うた。

この者は私の力を独り占めにしようとしているに違いない。故に私を連れ逃げ出したのだろう。

それが最も理に適う理由であると、私は思ったのだ。

だが、違った。なんと彼はこう答えたのだ。

「いやその、君の事、凄く綺麗だと思って……そしたら、なんだか俺達の目的で君を利用するの、なんか違うなってなって……」

それはあまりに理解が及ばない回答だった。

私が綺麗だから？　ただそれだけの理由で？

そんなことで、群れから離脱し危険に身を置いたというのか？

分からない、まったく理解ができない。私はそう思った。だから、言った。

「ふざけないで。君も何か私利私欲があつて私を連れ出したのでしよう？　それをそんな訳のわからぬ理屈で誤魔化して……不愉快だ、死ぬ！」

私は怒り彼の命を奪おうとした。だが、できなかった。

彼は私に抵抗し、私と拮抗して見せたのだ。

ただが人間が精霊である私に匹敵し、相對する。それは屈辱的な事であり、驚くべきことであつた。

「……人間如きが！」

私はそれに怒り、力を奮つた。だが、彼は私の手では倒れなかつた。荒れ狂う私の攻撃をしつかりといなしにいったのだ。

だが、その攻防の中で、私は思つていった。楽しい、と。

お互いが全力でぶつかり合うその空間は、とても健全な時間が流れていた。

ぶつかり合う力に嘘偽りは無い。むしろ、ぶつける拳と拳から、彼の言葉が嘘でないことが伝わってきたのだ。

それは拳を突き合わせるもののみ分かる事なのか、それとも単に魔力が共振し意思が漏れ出たからかは分からない。

だが、戦つていくうちに彼が本当に下心なく私を拐つたのだと、私は理解していった。

「……もういい」

ある程度の戦いを経て、私は言った。

「なんとなくだけど、君の言うことが嘘じゃないのは分かった。君がただ衝動的に私を連れ出し群れから抜けた馬鹿だという事もな。……だから、君の命を奪う事はしないでやろう。後は、せいぜい一人で頑張ることだな」

私はそう言つて、彼に背を向けた。隣界へと帰るためにである。だが、そんな私の手をまた彼は握つて、言った。

「待ってくれ！　もしよかつたら……俺のところで暮らさないか？」
「……は？」

私は思わずそう返した。彼が何を言っているのか分からなかったからだ。だが、彼が言うには下手に隣界に帰るより現実世界にいて潜伏したほうが身を隠せるのでは？　との事だった。

なるほど確かにそれは一理あると思つた。だが、人間世界に身をやつす場所がないために考えつかぬ事でもあつた。

しかしそれを目の前の彼が提案している。ならば、乗ることもやぶさかではない、そう思つた。

「なるほど……いいだろう。しかし、変なことを考えてみる、貴様の首が飛ぶと思え」

そうして私は彼の提案に乗つた。

「そうか！　よろしく！　えつと……」

私が彼の言葉を受けたことに彼は嬉しそつたが、私に手を伸ばして握手しようとしたところで何か悩んでいるようだった。その姿を見て、私は察した。

「ん？　もしかして名か？　ならばそんなものは私にはないよ。私はただの『精霊』だからね」

「なるほど……でも、それだと生活がしづらいな……なら……うーん……そうだ！　華恋！　華恋つてのはどうだ？」

「どう、とは？」

「いや名前だよ！　君の名前！　我ながらいいセンスしてると思うんだけど……」

「そうか。ならばそう呼ぶと良い。私はさして興味はない」

こうして私は華恋……皇華恋という名を与えられた。

ある意味、一人の人格を持つものとして初めて認められた瞬間でもある。

そのとき私は自分でも気づいていなかったが、このとき、私は確かに喜びを感じていた。

こうして名前を得た私は、彼が世界中に持つという隠れ家のうち、一つを選びそこで生活することになった。

私は彼から色々な事を教わった。

人間社会の事や、人がどういう考えで生活しているか、などである。

さらに、彼は知識だけでなくモノだってくれた。服だってそうである。

「ふうむ……服なんて靈力で作ればいいと思うのだけれど」

「まあ確かにそうかもしれないけど……でも、いろいろとある服を選んで買うってのも楽しいことだと思うよ。ほら、これとか華恋に似合うって！」

そうして彼が示してくれたのは、黒のブラウスに白のロングスカート。

似合うと言われピンとかこなかったのだが、彼がせっかくだと言ってくれているので、私はそれを購入し着るようになった。

それだけではない。ある日、私は彼の家に犬を持ち込んだことがあった。

捨て犬だった。私はそれを見たとき、人間とは他の命を弄び、面倒も見られない愚かな生き物だと思ふと同時に、その捨て犬を見捨てられない、そんな気持ちになった。

だから私は彼のところに犬を持ってきた。すると、彼は言った。

「よし、ならせつかくだし犬小屋を作ってうちで飼おう！」

そのとき、私はなんだか嬉しくなった。今思うと、彼が他の人間とは違うということ、そして、私の気持ちを汲み取ってくれたことが嬉しかったのだ。当時の私にはそれが分からなかったが。

ともかく、犬小屋を作ることになった。そのとき彼は言った。自分で作ってみてはどうか、と。

「こんなの、私の力を使えば一瞬なのに」

私は彼に言う。無駄な苦労などする必要がない。私なら指一つ動かせば立派なモノを作れる。そう思ったから。

だが彼は答える。

「まあ確かにそうだけどさ。でも、モノを作る楽しさってのは、なかなかいいもんだよ。華恋にも、それを楽しんでもらいたいなって」

「モノを作る楽しさ？ ……よくわからないけどまあ、君が言うなら……」

そのとき、私は彼への無意識の信頼が大分高まっていたのだと思う。故に、彼の言葉に従い彼と協力して二人で犬小屋を作った。

「……なるほど。これはなかなか」

そして私は感じた。彼と協力して作ることに對する、得も言われぬ達成感と興奮を。

こうして汗水流して苦勞するのも悪くない。私はそう思ったのだ。やがて、私は彼に心を開いていった。

彼ともっと一緒に時間を過ごしたい。彼ともっといろいろな事をしてみたい。彼にもっと自分を見て欲しい。少しずつだが、そう思うようになっていった。

お菓子作りもその一環だった。彼に手作りのお菓子を食べて欲しい。そう思って、私は彼がいない間に頑張ってケーキを作った。

「おいしい！ おいしいよ華恋！」

彼は私の作ったケーキを子供のように喜んでくれた。そんな彼の顔を見て、私も嬉しくなった。

そうして私はどんどんと色んな事を彼としていった。

一緒にゲームをしたり、一緒に映画を見たり、一緒に料理を作ったり、と。

その時間は一つ一つが濃厚で、矢のように過ぎていった。そんなある日、彼が言った。

「いつか、全部のケリをつけて、君と一緒に大学にでも通ってみたい

な」

「大学に……？」

「うん。ちやうど俺の年がそれぐらいだから言ってるだけだけどさ、学校って楽しんだよ。知らない事を学べて、沢山の仲間と一緒に時間を過ごして……俺は、華恋にもそんな時間を過ごして欲しいんだ」

「……ふうん。大学か。君が言うなら、きつと本当に楽しいんだろうね。いいね、大学。全部が終わったら、一緒に通おう」

私はそう彼と約束した。

きつとこのときからであろう。私の心に、彼を想う気持ちが——恋心が芽生えたのは。

当時の私にそれを自覚できてはいなかったけど、あるとき明確に彼を見る目が私の中で変わったのは覚えている。

彼を見ているとドキドキする。

彼に笑っていて欲しいと思う。

彼とずっと一緒にいたいと思う。

そんな気持ちの波が、私の中で大きくなっていった。

だが、そんな私の気持ちはすぐに潰えることとなる。

ある日、現れたのだ。彼が所属していた純正魔術師（メイガス）達の首領が。私を生み出した、張本人が。

そいつは私達の前に現れて言った。準備は整ったと。

一体なんの事かと思った。例えばどんな障害にぶつかろうと、彼となら乗り越えられる。そうも思った。

だが、そいつが強大な魔力を地面に流し込んだかと思うと、私の意識は途切れた。

そして、気づいたとき……私は夕暮れの中で、燃える街の中で取り返しのつかない事をしていた。

命を、奪っていたのだ。彼の、命を。

そいつがしかけたのは私の理性を奪い私を暴走させる術式だったらしい。

彼はそんな私を止めるために全力を尽くし、そして、自分の命を投げ出す事で、私の正気を取り戻させたのだ。

「う……そ……う？」

私は思わず呟く。

だが、私を抱き寄せる彼の腹部に大きな穴が空いている事実は、どうやっても覆そうにない。

「だい……じょうぶ……だ……から……」

取り返しのつかない事をしてしまったのに、まだ私の身を案じることを言う。私の頬を、力なく撫でてくれている。

だがそれが、彼の最後の言葉だった。彼はそう言うと、血を大量に吐き出して、目から光を失わせ、崩れ落ちた。

その血が私の顔にかかる。

視界が血で染まる。

夕暮れの朱（あか）と、血の紅（あか）と、燃え盛る街の赤が、視界を支配する。

朱（あか）、紅（あか）、赤、アカ、あか——

「あっ……あっ……うわあああああああああああああああああああああ
あああああっ!!?」

私に絶望が押し寄せてくる。憎しみが押し寄せてくる。私が私でなくなりそうになる。

私は私でなくなりかけていた。それが、やつらの目的だったのである。私の意思を奪い、力だけを手に入れるのが目的だったのである。

だが、私は反転しなかった。あまりにも強い憎悪が、私を支配した結果、私は私のままでいた。憎しみが、私をつなぎとめたのだ。

やつらは動揺していた。そんなやつらに私は一言、告げた。

「——【終末】」

ディレクスイレ

それは私の天使（シエムハザ）へ支配皇帝（シエムハザ）が持つ最大の権能の一つ。

霊装を白一色に染めながら放つ、最悪の一手。

星に存在するすべての命を支配し、すべてを消滅させる、禁断の一言。

それにより、私の世界は崩壊した。

人間も、動物も、植物も、すべてが死に絶えた、まさしく死の世界

へと変わり果てた。

「……………」

その後、私に去来するのは虚無だった。

憎しみを破壊として放出した私には、もう何も残っていないかった。

何も残らない世で、唯一残ってしまったのは肉体だけだった。

心は、すっかり壊れてしまったのだ。

「……………」

それから、いったいどれほどの時を一人で過ごしたのだろう。

どれほどの時を虚無に任せていたのだろう。

いつしか私は、私の世界から消えてしまった。

次元の狭間へと、私は消えたのだ。理由は分からない。ただの偶然かもしれない。あまりに空っぽになった私の中で、ふと感情が芽生えて現実逃避をした結果かもしれない。

ともかく私は、自分の世界から逃げ出した。

そして、記憶も力も何もかも失って、ただの『皇華恋』という一人の大学生になった。

自分一人すべてから逃げ出して。嫌なものから目を背けて。

これが私の辿ってきた道程。

想い人に想いを告げることもできずに迎えた、身勝手な女の愚かな末路である。

離別、そして――

「私が……殺した……私が……！」

華恋が壊れたラジオのように何度も繰り返す。

目を見開き、沢山の涙を流すその姿は、今までの快活な彼女からはまったく想像できない。

「華恋……落ち着け……華恋……！」

土道はそんな彼女に必死で声をかける。

吹き飛ばされ地面に打ち付けられた体が悲鳴を上げていても関わらず、にである。

「華恋……！ 無理をしなくていい、今は冷静になるのだ……！」

「大丈夫……私達が、側にいる……！」

土道だけではない。十香も、折紙も痛む体に鞭打ちながら立ち上がり、必死に彼女に呼びかける。

だが、華恋の耳に、その言葉は届かない。

「私は……逃げてきた……すべてを捨てて……私、なんて……すべてを滅ぼしたって言うのに……一人、ただのんきに……ああ、うわああああ……！」

華恋はガリガリと自分の頭をひっかき始める。

彼女の綺麗な髪がボロボロと地面に落ち始め、指先が真っ赤に染まる。

「私は……なんて事を……私は……私は……！」

「華恋ッ！ 華恋ッ!!」

叫び続ける土道。彼は一歩ずつ、体を引きずりながら華恋に近づく。

一方で彼女はそんな土道が目に入っていないのか、未だガリガリと自分の頭をひっかき続けている。

「華恋……！」

そしてついに、土道は華恋に触れられる程の距離に近づく。そのまま、華恋に手を伸ばす土道。

「あ……」

しかし、その土道の姿が。
必死に手を伸ばす、土道の姿が。

死ぬ間際の、優しく頬を撫でてくれた、
「彼」と重なって——
「い、嫌あっ!?!」

思わず華恋は、土道を跳ね除けてしまった。
「ぐっ!?!」

精霊の力で跳ね除けられた土道は、地面に凄い勢いでぶつかり、一度バウンドしてまた地面に倒れる。

「シドー!!」

「土道っ!!」

「が……!?!」

叫ぶ十香と折紙。

かろうじて意識を保っていた土道だったが、どうやら傷は浅くなく口から血を吐き出す。

「ひ……!?!」

その姿が、またも「彼」と被る。死ぬ直前の姿をどうしても想起してしまう。

「ごめんなさい……土道……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

それがあまりに恐ろしくて、あまりに辛くて、あまりにも悲しくて。
口から飛び出すのは謝罪の言葉のみになってしまう。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

ブツブツと繰り返す華恋。

その姿は、誰がどう見ても壊れていた。

「か……れん……だい……じょうぶだ……だから、だから……」

それでも土道は彼女に言葉をかける。大丈夫だと。とにかく彼女を落ち着けようと、言葉をかける。行動しようとする。

だが、土道が頑張れば頑張るほど、その姿が死に際の「彼」に見え

思わぬ再会

「……………は？」

士道が目を覚ますと、そこは不思議な空間だった。上も下もない、まるで浮いているかのような、しかししっかりと足をつける空間。

紫色のもやにつつまれた不思議な、しかしどこか懐かしい世界。

士道はそんな空間で目を覚ました。

「俺は、一体……」

「目を覚ました、士道？」

「え？」

士道に背後から声がかけられる。

声に士道が振り返ると、そこには少女がいた。

ふわふわとした髪型で、優しそうな笑顔をたたえている少女。

士道は、その少女を知っていた。

「凜、祢……？」

そこにいたのは、園神凜祢。かつて士道の中で溢れかけていた霊力を放出するために命を賭した精霊の少女である。

「今度は、最初からちゃんと思い出してくれたね」

「そうね。今度も忘れてたらキツめの一撃を食らわせてたわ」

「まあ別に一撃は食らわせていいんじゃない？ 最近気が抜けてだらしないしさあ」

「これはこれは手厳しい。とは言え、士道も士道で罪な男なものじゃないね」

「おー、パパは罪な男」

「なっ……!?! 万由里、鞠奈、蓮、凜緒まで……!」

凜祢だけではない。他にも消えていった精霊達である万由里、或守鞠奈、蓮、凜緒がいたのだ。

そこで、士道は気づく。

「もしかしてここは、現実じゃないのか……？」

「ふむ。有り体に言えばそうだね」

それに答えたのは蓮だった。

「ここは言うならば土道の中さ。土道に封印された自分達の残滓が、こうして君の前にあらわれている、と言えれば分かるかな」

「残滓……？」

「ええ、そうよ。始原の精霊である滯は消えたけれど、その力の派生である私達の残滓はあんたの中に残った。それが、別の世界の始原の精霊である華恋が現れたことによって影響されてこうしてあんたの前に現れることができた、ってところかしらね」

万由里がそう説明する。

一方で、土道は再会を喜ぶ間もなく華恋の名を聞いて反応する。

「そうだ！ 華恋！ 華恋は……！」

「ちよつと落ち着きなさいよ」

鞠奈が言う。

少しツンツンとした口調だったが、その中身に悪意はなかった。

「あんたは今、ダメージを負いすぎて気を失ってるのよ。それにあいつは、元の世界に戻っていった。どちらにせよ、今のあんたにあいつを追いかける事は無理よ」

「そんな……」

鞠奈からその言葉を聞くと土道は悔しげに拳を握り、歯を食いしばってうつむく。

「俺は、何もできなかった……！ 何も……！ 大切な友達が苦しんでいるのに、何一つ……！」

「土道……」

辛そうに苦しがる土道に、凜祢は声をかける。

だが、次に彼女が発した言葉は意外なものだった。

「まだ、終わりじゃないよ」

「えっ……!?!」

面を上げる土道。そんな彼を見て、凜祢は柔和な笑みを浮かべる。

「土道、考えてみて。華恋さんに当てられて私達の霊力が戻っているということとは、それは他の精霊達の力も戻っているということなの」

「他の精霊の力……はっ、サンダルフォン〈塵殺公〉……！」

士道は気づく。

〈サンダルフォン塵殺公〉。それは十香の天使であり、あらゆるもの——世界を隔てる次元の壁さえも断切する権能を持つ。

つまり、その力さえあれば華恋を追う事ができるのだ。

「つまり、まだ俺は終わってない……!」

「ああ、そうさ。君はまだ足掻ける。そして、それが分かったのなら、君はもちろん足掻いて見せるのだろう?」

「ああ、そうさ蓮。俺にまだできることがあるなら、まだ伸ばせる手があるなら、俺は諦めない!」

「パパ、すっごいいい顔してる」

凜緒が言う。彼女の言う通り、まだ希望があると分かった士道の目はとても輝いていた。

「それでこそ、士道らしいよ。じゃあ、そんな士道に私達も力を貸そうかな」

「力を……?」

最初は凜祢の言葉の意味が分からなかった士道。だが、彼女達が手をかざした瞬間、士道の体にどんと力が溢れてくるのを感じた。

「こ、これは……!?!」

「私達に当てられた華恋さんの世界の魔力を、より活用できるように士道に回しているの。これで士道だけじゃなく、他の精霊達も力を仕えるはず……」

「他の精霊達も!? なるほど、助かる、凜祢、万由里、鞠奈、凜緒、蓮……!」

頭を下げる士道。

そんな彼に、凜祢達はしようがないなと言った笑みを浮かべる。

「いいんだよ。士道がそういう性格だからこそ、私達も好きになったんだから」

「まったく、惚れた弱みつてのは辛いわね」

「私は別にそんなんじゃないけど……ただ、うじうじしてるあんたはあんたららしくないと思うし」

「パパー! がんばれー!」

「さあ行き給え。それであの哀れな道化となってしまった子を救うと良い。舞台には、常に英雄が立つものだよ」

「みんな……!」

士道の体がだんだんと光に包まれていく。それは、力を手に入れると同時に、凜祢達との再度の別れをも意味していた。

「ありがとう、みんな……! それと、またな……!」

士道はたくましい笑みで言う。それに対し、一同は笑い、そして答える。

『またね』



「……っ!」

「士道!? 目覚めたか!」

目を覚ますと、士道の耳に大きな声が響いてくる。十香の声だ。

あたりを見回すと、他の元精霊達も集まっていた。どうやらヘフラクシナスの医務室らしい。

「士道! あなた——」

「琴里!」

話しかけてきた琴里の肩を士道は掴む。そして、じつと鋭い視線を合わせる。

「へっ!? 士道!?!」

「琴里、それにみんな! 聞いてくれ!」

そうして士道は立ち上がり話す。自分が一時的に霊力を取り戻したこと。そして、みんなもまた力を取り戻せるということ。

「お願いだみんな。俺と一緒に、華恋を助けに行ってくれ! 俺は、あんな顔で泣くあいつを放つてはおけないんだ……!」

その説明をした後に、頭を下げる士道。

彼のそんな姿を見た、元精霊達はお互いを見合わせ、そして、苦笑した。

「何言ってるのよ士道。力を取り戻せてるならあなた一人で行かせる

わけないでしょう?」

「そうですよー! だーりんのあるところこの誘宵美九ありですー!」

「はい……! それに、華恋さんももう私達のお友達です! 助けた
いという気持ちは一緒です……!」

「カカカ、異なる世界へと行った同胞を救うのもこの颯風の巫女たる
八舞の宿命よ」

「賛同。友人が困っているなら助けるのは当然の事です」

「ま、私がどれだけの力になれるかは分からないけど……全力を尽く
すわよ」

「いやー並行世界かー! 実際には見たことないから、案外楽しみに
なっちゃうねー!」

「主様も華恋も助けるのに、理由はいらないのう」

「あらあら、士道さんから頭を下げられたら断れないではありません
の。仕方ないですわしやうがないですわ、きひひひ」

「士道の願いは私の願い。それに彼女も友人。断る理由はない」

「ああ! 私とみんなと士道とで、華恋を助けよう!」

「みんな……!」

士道の言葉に答える彼女達に、士道は心から嬉しくなる。

だからこそ、確固たる意思を持った目で彼女達を見て、言う。

「ありがとう……! よし、行こう! サンダルフォン〈塵殺公〉!」

そうして士道は呼び出す。十香の天使であり次元を渡る鍵でもあ
る天使の名を。

彼らは旅立つ。

別の世界にいる、大切な友人を助けに。

Unrequited love

「……………」

風吹きすさぶ荒野に、華恋は立っている。命のまつたく感じられない、冷たい荒野。

彼女は今、そこにいた。

命のない獣に囲まれながら。

「グルルルルルル………」

その数は無数。視界全体が不定形の獣に覆い尽くされている。

「ガアッ！」

一斉に襲いかかってくる獣。

華恋はそれに合わせて右手を振りかざす。すると、一斉にその怪物達の首が跳ね飛び、地面に落ちて消滅していく。

しかし、それでも獣達は減る雰囲気はない。華恋は、その光景を見て自嘲気味に笑った。

「私に延々と戦わせて、ゆつくりとマナをこの星に帰そうというわけね……いいよ、付き合っただけ。苦しみ続けることが私の贖罪と言うのなら………」

諦めに満ちた華恋の表情。

そんな彼女を狙い、次の不定形の獣が華恋に飛びかかる。

「さあ、来い………」

そんなときだった。

「はあああああああああああつ！」

「っ!？」

突然華恋の目の前に影が現れ、襲いかかる獣を斬り伏せたのだ。

華恋は驚いて目を見開く。

そして、その影の正体に華恋はさらに驚いた。

「……土道!？」

そう、その影の正体は^{サンダルフォン}へ塵殺公^を片手に持った土道だったのだ。

さらに彼だけではない。彼の後に、十香、折紙、二亜、狂三、四糸乃、琴里、六喰、七罪、耶俱矢、夕弦、美九が霊装を纏って現れたの

だ。

「よう華恋、待たせたな」

「待たせたなつて……どうして？」

未だ驚愕し続ける華恋。そんな彼女に、土道は言う。

「俺はお前に何があつたか詳しいことは知らない。でもな、大切な友達が一人泣いてるところを見捨てられるほど、薄情なつもりはないぜ」

「……でもこれは、私の罪で……」

「それがどうした！」

小声で言う華恋に、土道はピシヤリと言い放つ。

「お前に罪があるつてんなら、が何か辛いことがあるなら、俺と一緒に背負つてやる！ いや、俺だけじゃない！ ここにいるみんなが、その覚悟で来てる！」

土道の言葉に、頷き華恋を見る精霊達。

その彼女らの顔が、土道の頼りがいのある笑みが、華恋の心に響いていく。

「華恋！ お前は俺達と一緒にいて退屈だったか？ 苦しかったか？」

「そ、そんなことは……！」

「ならまたみんなと一緒に過ごそうぜ！ まだまだ俺達は一緒の時間を過ごせるんだ！ 前に進むことは罪から逃げるつてことじゃない！ 前を向くことだつて、できるんだ！」

「土道……！」

華恋は思い出す。彼や彼女らと共に過ごした日々を。

その日々は、間違いなく楽しかった。ぬくもりをもらった。それは、かつて「彼」と共に夢見た日々そのもので――

「それによー！」

更に、土道は言う。

「俺はまだ、お前と二人っきりのデートをしてないんだ！ それなしで、一人で俺の前から消えてるんじゃないやねえ！」

「……土道……ふふっ」

士道の意外すぎる言葉に、華恋は思わず笑ってしまふ。先程までの自嘲とは違った、明るい笑いだ。

「なにそれ……ふふ、でも、そうだね。デートだなんだと言っても、私はまだ士道とちゃんとしたデート、してないね」

「ああ、だから！」

「分かったよ、士道。私も……覚悟を決めた」

「華恋ー！」

微笑む華恋に喜びの色を見せる士道。

華恋の中で、そのとき確かに変わったものがあつた。

「でもまずは、こいつらを片付けないと……士道、私に考えがある。そのため、少し時間を稼いで欲しい」

「分かった！ みんな、いくぞー！」

「ああ、士道っ！」

士道の声に高らかに答える十香。

「ありがとう、みんな」

答えるように、華恋はすつと両手を広げて瞳を瞑る。何かの権能を振るうための準備のようだった。

精霊達はそんな華恋を守るように四方に駆ける。

「でやあああああああああああああああつ！」

まず敵に切り込んでいったのは十香だ。彼女の〈塵殺公〉が一瞬で獣達を斬り伏せていく。一振り、前方の獣達がすべて吹き飛んでいった。

「〈絶滅天使〉！」

続けざまに折紙が〈絶滅天使〉で次々に光線が降り注ぎ、獣達を焼き払っていく。まばゆい光は不浄な獣を許さない。

「オリリン！ そっち左翼の奴が飛び出そうとしてる！ ミツキー！

今度は右！」

二亜が〈囁告篇帙〉で無数の敵の動向すべてを察知し、精霊達に伝える。彼女の全知からは不定形の獣と言えど逃れられない。

「はいー！ 任せてくださいー！ 〈破軍歌姫〉！」

美九が〈破軍歌姫〉の歌声で獣を吹き飛ばし、また操って同士討ち

させていく。彼女の歌声は獣達にも有効であるようだった。

『おっほー！ みんなやるねえ！ それじゃ四糸乃！ よしのん達も頑張ろう！』

「四糸乃！ 私も一緒に！」

「うん！ よしのん、七罪さん……！ 〈氷結傀儡〉……！」

「〈贗造魔女〉——【千変万化鏡】！」

四糸乃の本物と七罪の模倣した〈氷結傀儡〉が同時に現れ、一斉に一体を氷結させる。

その荒れ狂う吹雪に、獣達は耐えられない。

「次は熱いのでいかがかしら？ 〈灼爛殲鬼〉——【砲】！」

琴里が強力な火砲で一帯を焼き払う。その圧倒的火力に獣達は足をすくませる。

「あらあら、琴里さんも張り切っていますわねえ。これはわたくしも負けていられませんわねえ、きひひひひ。さあおいでなさい、わたくしたち！」

「きひひひひ！」

「きひひひひ！」

狂三が大きく広がった影から自分の分身を大量に召喚する、数には数を、である。

「くうー大軍勢を相手に全員で力を合わせるって燃えるー！」

「奮戦。この状況、八舞の力を存分に活かすときです。さあ、生きますよ耶俱矢」

「うん、夕弦！」

『〈颯風騎士〉！』

巨大な槍を出す耶俱矢、同じく巨大なペンデュラムを出す夕弦。二人は揃って武器を構え、高速で獣の群れに突撃していく。

彼女達の通った後には暴風が巻き起こり、獣は一匹たりとも残らない。

「やれやれ、節操のない化け物共じやの。どれ、むくが躡をしてやるのじゃ。〈封解主〉——【解】！」

六喰が〈封解主〉により次々と獣達を分解していく。その回避不可

とも言える攻撃は圧倒的であった。

しかし、獣達も負けてはいない。その莫大な数を活かし、精霊達の防御網を抜けていく個体もいくつかいる。

「はあっ……!」

だが、それを土道が許さない。土道は華恋に近づく獣達を次々と斬り伏せていく。

「通すかよ……!」

そうして次々と撃退されていく獣達。

精霊達の強大な力と土道の奮戦によって、華恋は守られていた。そうして次々と獣達が倒されていった、そのときだった。

「ありがとう、土道……これで、すべてを終わらせられる——」

華恋は、側で戦う土道に向かって言った。

「華恋……!?!」

華恋の霊装は、真っ黒に染まっていた。

そして、眩く。

「——【再臨】」
アドヴェントウス

彼女がそう眩いた瞬間、世界が光で包まれた。

「うっ——」

土道達は思わず目を瞑る。

そして次に瞳を開いたとき、彼らは驚愕することとなった。

「これは……!?!」

なぜなら、先程までの荒野が一瞬のうちに花畑になっていたからだ。

それだけでなく、遠くでは木々が生え、蝶や鳥が空を舞っている。

先程まで存在しなかった命が、一瞬にして世界に満ちたのだ。

「……………」

それと同時に、獣達が消滅していく。まるでもう存在する理由はないと言うように。

「華恋……これって——」

何が起きているのか華恋に問おうとする土道。だが、彼の言葉はそこで留まった。

なぜなら――

「え……う？」

華恋の体が、少しずつ光となって消え始めていたのだから。

「華恋、お前……」

「ごめんね土道。私、土道達と一緒にデートできそうもない」

華恋は笑っていた。とても寂しそうな笑顔で。

「どういうことだよ……！ どうなってるんだよ華恋……！」

【再臨】は私が世界を滅ぼした【終末】とは対極の権能。【終末】デイエスアイレ

によつて奪つた命を元通りに復元する力。もちろん私を操ろうとした奴らは除外してあるけどね。ただ、破壊するのは一瞬でも創造するのにはより大きな力がある。……その代償が、私の存在」

「そんなの……そんなの……あるかよ！」

土道は消えかかる華恋に掴みかかる。今にも泣きそうな顔で。

「これから一緒に前を向いていくんじゃないのかよ！ 他にも、

他にも手があるはずだ！ 何か……！」

「ううん、土道。私が罪を精算するには、これしかないんだ」

「罪の精算……！ 俺はそんなこと……！」

「ごめん……でも、これは必要なことなんだ。私が、土道達に恥ずかしくないようこうやって向き合うためには。私自身の、ケジメなんだ」

華恋はふるふると頭を振る。土道は、それでどう足掻いても華恋が消えてしまう現実を突きつけられる。

「そんな……！ こんなの……！ こんなの……！」

土道ははらりと涙をこぼした。他の精霊達も、辛そうな顔で華恋を見ている。そんな彼らにつられて、華恋もまた、笑つたまま涙を流す。「ありがとう、土道。私のために泣いてくれて……君は、彼にも並ぶくらいなの、いい男だったよ。だから――」

そう言うと、華恋はそつと抱いて、自分の唇を土道の唇に重ねた。

華恋と土道のぬくもりが混ざり合う、優しいキスだった。

「これは、私の気持ち。片思いを抱えて泣きながら消えるはずだった私を、最後に笑顔で逝かせてくれて、ありがとう――」

それが最後の言葉だった。

いつか、きつと

「…………ふう」

華恋が消えた翌日。

土道は天宮市を一望できる高台から街を眺めていた。

青空の下に広がる街の景観は絶景であり、うだるような暑さも吹き抜ける風であまり気にならない。

しかし土道の表情は明るくない。

「土道…………」

そんな彼に後ろから声をかける者がいた。

十香だ。

「十香…………どうして？」

「いや、土道がここにいる気がしてな…………」

「そうか…………十香にはなんでもお見通しだな」

寂しげに笑う土道。

そんな彼に、十香は胸が締め付けられるような感覚になる。

「華恋の事を気にしてるのか…………」

「…………ああ」

土道は応えながら手すりに腕を置いて再び街に目を移す。

十香もまた街を見ながら土道の横に並ぶ。

「俺はあのとき、華恋が消えるのを見てることしかできなかつた。

それで、やつぱり思うんだよ。他にもできることがあつたんじやないか、方法があつたんじやないか、つてな」

「土道…………気持ちは、私も同じだ」

十香もまた悲しげな表情で言う。

「私ももつと華恋のことを理解してやれていれば、何か別の手段が取れたのではないかと思う…………あいつが消えてしまった事が、胸に今でも刺さっているような感じがある。…………しかしだ」

と、そこで十香は土道に向き直る。

土道も、十香の顔を見る。

十香は、落ち着きながらも確固たる意思のある瞳をしていた。

「同時に、こうも考えるのだ。士道は華恋を間違はなく幸せにすることができたと。最後に、あの明るい笑みを取り戻させることができたのだと。士道のしてきたことは、決して、無駄ではないと」

「十香……」

「それに……これを見てくれ」

そう言って十香が取り出したのは、手帳とストラップだった。

ストラップには士道は見覚えがあった。それは、華恋と十香と折紙と士道の四人でデートをしたときにゲームセンターで取ったストラップだった。

「これは……」

「あのあと、ヘラタトスクの人達が華恋の部屋を調べたときに出てきたらしい。どうやら、これとこの手帳は華恋が世界を移動する前に転移させていたらしいのだ」

十香はそう言いながら手帳を開く。

そして、その開いたページを見て士道は目を見開く。

「っ……!? これ、あのときの写真……!」

手帳に収められていたのは、士道の家で開いた小さなパーティーのときの写真だった。

華恋と士道、そして元精霊達全員が写った集合写真だ。

写真の中の華恋は、とてもいい笑顔をしていた。

「これを、士道に渡せと琴里に言われてな……受け取ったとき、琴里の言いたい事が私にも分かった気がするのだ。この楽しかった思い出を傷つけないように残していったのだ。華恋にとっては、間違はなく私達との思い出は良いもので、別れを告げた後も私達に覚えていてもらいたかったのではないか。それほどまでに、私達との日々を大切に思ってくれていたのではないか」

「華、恋……!」

士道は手帳とストラップをぎゅっと握りしめる。そして瞳をうるませるが、士道はそこで涙をこぼすことはなかった。

涙が落ちるのを必死で堪えて、きつと笑顔を作ったのだ。

「そうだな……あいつとの日々は間違いなくかけがえのない日々だっ

た。それをいつまでもしめっぽい顔してたら、あいつに失礼だよな」
「ああ、そうだな……」

「それに、だ。俺は一つ考えていることがあるんだ」

更に、土道は言う。そこには今までの暗い雰囲気はない。

「考えていること、か？」

「ああ。最後、華恋は俺にキスをした。そのとき、もしかしたらだけど、あいつの霊力が俺に流れ込んできたかもしれないんだ」

「何!?! それは本当か!?!」

「確証はないけどな。だから、あいつの世界に行く直前に俺が俺の中にいた精霊達に出会えたように、もしかしたらまた俺達はあるに会えるかもしれない、そう思うんだ」

「なるほど……いや、会える。きつと会えるぞ!」

十香は嬉しそうに笑う。土道もそれに笑って頷いた。

「ああ!・きつとそうだよな!　だから、俺達はあいつとまた会える日を信じて、前を向いて生きていかなきゃならない。いつか会えたときに、あいつに恥ずかしくないように、な」

「そうだな……きつと、会えるぞ。いつか、きつと」

「ああ……!」

十香と一緒に笑顔でうなずき合う土道。

そして、言う。

これは決して永遠の別れではない。またいつか、出会えると希望を抱いて。

「いつか、きつと……!」